付　　録

- 辞　　解
- ミサで奉読される書簡と福音
- 四福音書和合表
- 主要な引証

辞　解

▲アアロン　レヴィ族の人でモイゼの兄。モイゼを通して祭礼のことなどを規定された時、神は特にアアロンを選んで、いっさいの祭務を彼につかさどらせ給うた。この時からアアロンの子孫は代々司祭となり、その家長は大司祭となった。

▲悪鬼　悪魔に同じ。

▲悪魔　元来、天使として神に造られた純靈。しかし自由を乱用して反逆したため神に捨てられ地獄の苦しみに処せられた。それゆえ悪魔は神を憎み、真の神から人を遠ざけようとして悪を勧め、自分とともに地獄に落とそうと努める。また悪魔は人間などにつくこともある。悪魔のことを悪鬼、汚鬼、サタン（反対者）とも言い、またしばしば聖書中ではベリアル、ベエルゼブブ、アバドンの名をもって呼ばれた。

▲アジア　新約聖書にアジアとあるのは今のアジア州をさすのではない。それでこれを小アジアと訳したが、これもまた今の小アジア全部をさすのではない。小アジア中、ロマ領となり、その一州として帝国に編入され、ペルガモを首府とするアジア、プロコンシュラリスの地方をさす。したがってアジア人と言う場合も、特にこの地方の人民のことである。

▲アダム　人類の元祖で、妻をエワと言う。アダムは義人に造られ、超自然の賜ものをも受けながら、神の戒めに背いたため、その賜ものを失い、すべての人間にその罪と罰とを及ぼした。キリストが第二のアダムと呼ばれ給うのは、キリストがその罪を滅ぼして人類を贖い、賜ものを再び回復されたからである。

▲アブラハム　真の教と救い主に関する約束を多神教の中に保たせるために選ばれた民イスラエルの太祖。神から召されて生国を去り、おびただしい子孫と万民のために祝福となることとを神から約束された。百才になんなんとする時、本妻サラによって一人の嫡子イザアクを得たが、イザアクを犠牲として献げるよう神の命令を受け、これを実行しようとした時、一天使にとめられ、その信仰と従順の報いとして神は彼にキリストの先祖となることを約束された。イスラエル人をアブラハムの子と言い、またキリストをアブラハムの子と呼ぶのはこのためである。

▲アベル　人祖アダムの子で、小羊の犠牲を神に献げ、これが神の心にかなったため、兄カインに妬まれ、絞め殺されてしまった（創世記4）。アベルが死んでから、なおもの言うと言われるのは、アベルの死後彼の血がカインの上に天罰を招いたからである。

▲按手　もとは自分のものを他人に譲与する印であったの

が、いつの間にか人を祝福したり、権利をゆずったりする時にこれを行なうようになった。例をあげるとヤコブが二人の子どもを祝する時(創世記48・13、14)、アアロンが大司祭就任の初めに人民を祝する時(レビ記9・22)、モイゼが自分の権力をヨズエにゆずる時(民数紀略27・18、23、申命記34・9)などは、みな按手を行なっており、またヤイロが娘の復活をイエズスに願った時も、「来りて按手し給え、しからば娘生きん」と言っている(マテオ9・18)。イエズスはまたしばしば按手をもって病人をいやし給うた。すなわち按手は、普通の人にとっては単なる印にすぎないが、キリストにとっては実に霊能を付与する方法であった。ここから按手礼が教会において堅信の秘跡を行ない、司祭などの位を授けるために施行される礼式となった。

▲安息日　神の命令によって労働を休まなければならない一週間目ごとに来る一日を言う。旧約時代の安息日は土曜日であったが、モイゼの律法では、安息日の労働はきびしく禁じられ、違反者は重刑に処せられた。歩くことも十町以上は許されず、食事などは前日に用意しなければならず、このため前日を用意日と言った。新約においては、キリストのご復活および聖霊降臨が日曜日に当ったため、旧約と異なることを示し、日曜日を安息日とした。

▲アメン　ヘブレオ語では「しかり」の意味で、祈りの終わりにつくときには「しかあれかし」の意味である。

▲イザアク　アブラハムの嫡子。神の祝福を世にもたらすはずのイスラエルの民の太祖。

▲イザヤ　キリスト降生前およそ七〇〇年ころに生存した人。四大予言者中、最も大いなる予言者と言われ、その予言はイザヤ書にのせられている。

▲イスラエル　(1)「神と戦い奉る」の意味で、太祖ヤコブに与えられた名前(創世記32・28)。(2)ヤコブの子孫はイスラエルの子らと呼ばれ、また代々、イスラエルの家、イスラエルの地などと言われたことから、初めはヤコブのすべての子孫をさしていたのに、サウル王の死後、国が分裂したため、北方の十族をイスラエルの国、ユダ族をユダ国と呼んだ。ところがその後再びヤコブの子孫全部をイスラエルと呼ぶようになったのである。地名としてはパレスチナ全地方、場合によってはイスラエル国となった十族の地を言い、イスラエル人という時はヤコブの子孫、あるいはイスラエル国の人をさす。

▲異邦人　聖書においては、もと地理的な語で、イスラエル人の土地以外に住む国民を言っていたが、だんだん宗教的な意味を帯びるようになり、あるいは偶像崇拝者、あるいは真の神を奉じない人々、すなわちユデア教以外の一般の人々をさす言葉となった。

▲祝い日　キリストの時代に執行された祝日で、福音書に出て来るのは過ぎ越しの祝い、幕屋の祝い、奉殿記念祭の三つである。

▲家　イスラエルの家またはユダの家などと言うのは、もちろんイスラエル、ユダの子孫を言う。

▲永遠　初めもなく終わりもないこと。あるいは初めがあっても終わりのないこと。

▲役　聖書に「役」とあるのは、教会で、あるいは神を礼拝し、あるいは人の霊魂を導くために特別の任務を帯びて行なう務めのことで、「聖役」と言うのは、あるいは神または人の救霊に対し、最も直接に関係のある務めのことである。

▲エザウ　ヤコブの兄で、エザウとヤコブは双生児であったが、母レベッカの胎内において、はや兄弟は相衝突し、将来相反する前兆を示した。またエザウは、ある時、畑から帰って弟の持っていた豆の欲しさに、その長子権を売ったことがある。（創世記25・19以下）

▲エジプト　アフリカの東北端に位し、イスラエル人民が四百二十年の間、虐待を受けた有名な国。

▲エピキュリアン　快楽を主義とし、神を軽べつして唯物論をとなえ、道徳法をも快楽に従属させる哲学の一派。

▲エホヴァまたはヤヴェ　旧約において真の神をさす言葉で旧約聖書中に約六千回この言葉が出ており、ギリシア語およびラテン語では、これを「主」と訳した。

▲エリア　列王記略上の十七章以下に見られる予言者で、天に引き上げられた。彼は世の終わりに人々を改心させるため再び現われるべき者である。

▲エリコ　旧約時代、イスラエル人民が約束の地に入ろうとした時に城壁が奇跡的に倒れた町。ヨズエ記二章以下参照のこと。

▲エリゼオ　予言者エリアの弟子で、師の能力をゆずられた。列王記略上十九章以下参照のこと。

▲エルザレム　ユデア教の中心地で、およそ二十万の人口があったが、商業はふるわず、市民は各国から参堂する信者によって生活し、ひたすら心を宗教のことに留め、政治上の問題も、律法および宗教に関することでなければ、しいて関係しなかった。この都市は海抜約二百五十丈、シオン山およびモリアの山の上に建って各地方を見おろしていたから、エルザレムに行くことを「のぼる」と言う習慣があった。

▲エレミア　四大予言者中の第二の人で、キリスト降生前六九六年に聖役を始めた人。その予言はエレミア書となった。

▲恩寵　旧約聖書では、大体、長上から受ける寵愛、特に神からこうむる寵愛のこと。原語では、自然に寵愛を得させる

肉身上あるいは道徳上の美点などのこと。

新約聖書においては、

第一、おおむねイエズス・キリストの功徳によって人を聖化する恵みのこと。この恵みは普通の恩恵とちがい、神が救霊のために施してくださる超自然の恵みで、これに二種類ある。

(1) **成聖の恩寵**　これは神の寵愛であって、人はこの恩寵によって罪を許され神の子とされ天国の福楽を受け得る者とされる。この恩寵は愛と同じもので、大罪によって失われるが、完全な痛悔および告白の秘跡によって再びこれを回復でき、また徳の行為によって増加させ得、終わりのない幸福をもって報いられる。信者が神の住み給う所となって聖霊の聖殿、キリストの御体の部分、神性にあずかる者と言われるのは、全くこの成聖の恩寵を有するためである。

(2) **助力の恩寵**　事に応じて善をなし、または悪を避けさせるために知恵を照らし心を強める恩寵で、だれにでも与えられるが祈りによって特に受けることができる。しかし、人がもし自由を乱用して恩寵の勧めに抵抗するならば、だんだんにその効果は薄くなって、ついには天罰として取り去られることがある。聖書の中に、神が人をあるいはかたくなに、あるいは盲目に、あるいは悟り得ないようにし給うたとあるのは、ほかでもなく人が真理に服すように恩寵を与えられたのに、長くこれに抵抗したため、ついに恩寵を取り去られて悪心のままに任せられ、感化を受けずじまいになったことを言うのである。

第二、場合によっては、旧約の律法に対して新約の福音を恩寵と言うことがある（ヨハネ1・17、ロマ書6・14、ペトロ前書5・12など）。

第三、超自然の賜ものと霊的賜ものとは相似するために、宣教し、奇跡を行ない、他国語を語り、予言することなどの恵みをも恩寵と言い（ロマ書12・6、15・15〜19、コリント前書12・28、エフェゾ書3・8など）、また布教に召されたことも恩寵と言った（ロマ書1・5、コリント前書15・10など）。

第四、心の内の恩寵と道徳の実行とは相関連するために、キリスト教的徳のことも一般に恩寵と言った（コリント後書8・7、ペトロ後書3・18）。

第五、来世の福楽もまた恩寵と呼ばれた（ペトロ前書1・13）

▲**カイン**　アダムの長子。ねたみのために弟アベルを殺し、神から呪いを受けた人（創世記4・1〜24）。

▲**カイフア**　イエズス・キリストの宣教当時、大司祭だった人。

▲**会堂**　礼拝所はエルザレムの聖殿がただ一つしかなかったが、ユデア人が、互いに集まって教義を聞き、また祈禱を行なうための会堂はあちこちにあって、安息日にも、また他の日

にも、みながここに集まり、会堂ごとに司があって事務をつかさどっていた。

▲割礼　陰茎の包皮を切り取る式で、衛生上の意味で太古から多くの国に流行したのを、神がアブラハムと結ばれた契約の印として行なうようアブラハムに命じ給うた。その時以来、旧約の宗教の特別の式となり、宗教上の大別の印となったが、新約によって廃止された。そのほか形容語として邪欲に打ち勝ち、ひたすら聖霊の指導に従うことを心の割礼と言い、また心がかたくなで神の教えに耳をかそうとしないことを耳の無割礼と言った。

▲カナ　ガリレア国の町で、イエズスが水を酒に変化され、また王官の子をいやされた所。

▲カナアン　もとイスラエル人民の祖先の住んだ所で、パレスチナの西方にあたる。

▲神　聖書で言う神は、天地万物を存在させ給う唯一無二の造物主である。神は三位一体と言われて、前後上下の差別のない父と子と聖霊との三位を有され、ともに永遠で、同一の全知、全能、全善を相ともに備え給い、聖書の文面上から見ると、父は万物を造り、これをつかさどり、子は人となって人類を贖い、聖霊は人の心を聖化し給うかのように相異なる働きをされるようであるが、そのなし給うところは同一同様である。

神はもちろん霊にてましますから、無形で、かりにも人体のような姿を持ち給わない。ところが聖書中に、神の御目、御耳、御手などと言うのは、神人同形説から出るのではなく、ただ理解しやすくするために形容して言ったにすぎない。それゆえ、神の御目、御耳とは、神の全知すなわち万事を知り給うことを言い、神の御手、御腕、右の御手とは、神の全能の御計らいを言う。また神は喜び、悲しみ、悔い、怒り、なだめられ給うかのように書きしるされていることがあるが、このような変化は、かりそめにもなく、ただ人の善悪によって人間に及ぼし給う賞罰を形容したのである。ちょうど太陽が、あるいは輝き、あるいは曇り、あるいは照り、あるいは暮れ、氷を溶かし、泥を固めるような異なる種々の働きをするように言われるけれど、いつも変わることなく、ただ太陽の作用を受ける事物の状態の変わり方によって、及ぼされる影響も違うことを示すにすぎないのと同様である。造物主を真神と呼び、一般に神々と呼ばれる神を偽神と言う。

▲神の国　人の造られた目的として来世で神を見奉り、神によって終わりなくこうむるはずの福楽をさすと同時に、この世でその福楽を得させるためにキリストの建て給うた教会を言う。すなわち人はみな同一の神を主権者と仰ぎ、各自の国籍にかかわらず同国民と見なして相愛し、ひたすら神のおぼしめし

を守って、一つの理想的国家を組織する者として神に召されたためである。

▲ガリレア　サマリアの北西にあって、土地は豊饒で人口は稠密、またその住民は労働に堪え営利に懸命であるが、宗教心が深く、遠国との交際によってユデア人よりも度量が寛大である。ガリレアの有名地は、ナイム、ナザレト、カナ、チベリアデ、マグダラ、カファルナウム、ベッサイダ、コロザイン等で、またタボル山や、ガリレアの湖、チベリアデの湖とも言われるゲネザレトの湖もある。北西の地方では、フェニキア州の海辺であるチロやシドンの町もやや名高かった。

▲カルヴァリオ　この言葉はギリシア文には見えない。ゴルゴタとあってされこうべの所と訳される。イエズス・キリストが十字架につけられ給うた所で山ではない。ちょっとされこうべに似たような形の岩である。現在は聖堂内にこめられている。

▲監督　各地方の教会をつかさどる者で、長老に似た職務だったため、初めは相方とも監督または長老と呼んだが、教会の発展にともなって、次第にそれぞれの仕事が分かれ、これを区別することが必要となり、階級も定まって、監督は長老を支配するものとなった。現在、教会では、長老を司祭、監督を司教と言う。

▲完徳　万徳を備えていること。神に対しては、万徳を限りなく備え給うことを言い、人に対しては、ひたすら力をつくして義務を全うし罪を避けて自分の身分に相応する徳を完全に修めることを言う。

▲義　「正しい」の意味で少しも正しい道をまげないことを言う。「神の義」とは、片寄ることなく万事を治め、人の善悪を正しく賞罰し給うこと、あるいは神が人に命じ給う正しいことを言い、また人を義化し給う恵みのことを云う。また人の場合には、神に対し、他人に対し、自分に対して、正しい道を守ることを言い、このような人を義人と呼ぶ。「義とされる」とは、人が改心してその不義を許され、神のみ心にかなう者となることを言う。「あることが義として人に帰せられた」というのは、そのことが、その人の既往の不義を許され義人とされる原因となったことを言う。

▲ギリシア人　ギリシア国の人をさすほか、ギリシア語を話すユデア人でも、一般にはまた、ユデア人に対してユデア教外の人々を言った。

▲キリスト　注油された者の意味で、注油の式を授けられて聖職に任命された者、すなわち司祭、国王、予言者などをこう呼んだ。また有形的注油を授けられなくても神の恵みによって特別の任務を受けた人のこともキリストと言った。特に旧約時代から選民を救うはずの者をさしてメシア、訳せばキリスト

と名づけたが、予期したとおりイエズスは旧約の予言を全うされ、司祭、霊界の国王、予言者の任務をつくされたところから、特にキリストと呼ばれ給うたのである。

▲**兄弟**　この言葉が聖書中に用いられるのは約千回以上であるが、ほんとうの兄弟をさすことは非常に少なく、甥や従兄弟、遠い親類、同族の人、同国民、また、国籍は違っていても同盟国の国の人、朋友、一般の人民までも、兄弟と呼んだことがある。ちょうど東洋で四海兄弟（しかいけいてい）などと言う時の兄弟の語と同様である。新約聖書では、イエズスは、十二使徒やその他の弟子たち、またイエズスの御言葉を聞いて御父のおぼしめしを守る人々を兄弟と呼び給い、使徒たちもまた、すべての信者を兄弟と呼んだ。これはすなわち、みな同一の神の子どもで、同一の天父を仰ぐためである。

▲**イエズスの兄弟または姉妹**　これらの語は、新約聖書中、十二ヵ所にかかげられている。姉妹の名はわからないが、兄弟の名はヤコボ、ヨゼフ、ユダおよびシモンとあって、この中の三人は十二使徒の中に入っている。これらの兄弟は、あるいは実の同胞、または養父ヨゼフの先妻の子であると言う人があるが、カトリック教会では、もとより聖母の終身童貞性を信じ、いわゆるイエズスの兄弟というのは、イエズスの親族にすぎないことを主張する。すなわち彼らは、一度もマリアもしくはヨゼフの子と言われたことがない。彼らの父母が別にあることはこのことから明らかとなろう。すなわち、マテオ**10**・3、**27**・56、マルコ**3**・18、**15**・40、47、ルカ**6**・15、16、**24**・10、ヨハネ**19**・25、使徒行録**1**・13、ユダ書1を参照すると、彼がクレオファ（またの名はアルフェオ）の妻であった他のマリアの子であったことがわかる。かえって聖母マリアは単にイエズスの母と言われ（ルカ**1**・43、ヨハネ**2**・1、3、使徒行録**1**・14）、イエズスも *ουτος μαρια'ς* と言って、あたかも寡婦のひとり子のようにしるされている。もし、ほかにマリアの子があったならば、イエズスは、どうして十字架上で聖母を彼ら、しかも使徒である彼らにゆだねないで、他人であるヨハネにゆだねられたのだろうか?、他の兄弟の中にはイエズスを信じないものがないでもなかったが、これは、あるいはイエズスの人望をねたみ、またはファリザイ人などのざん謗に驚き、自分もまきぞえにされることを恐れたためで、ご昇天後すなわち聖霊降臨の日には聖母や使徒たちとともに心を同じくして列席していたのである。

▲**教会**　キリストの教えを奉ずる人々の団体のこと。キリスト御自ら「わが教会」と呼ばれて、これを設立してペトロに託され、またペトロを教会の頭として、鍵の印をもって彼に全権をゆだねられ、教会が悪魔に負けないことを約束された。ま

た教会をしばしば天国、あるいは神の国と名づけ、饗宴、網、畑、羊の群などにたとえ給うた。それでこの教会は人を天国に導くはずのもの、または救靈に関する問題を決する権利を有するものである。パウロはしばしば教会を「神の家」、「生き給う神の教会」「信者が肢体であるキリストの御体」「真理の柱かつ基」などと呼んだ。そして種々のたとえをもって教会の社会的性質や一致の必要、また教会会員相互の親密な関係、およびキリストがご自分の御血をもって教会を贖い、聖靈がひたすらこれを導き給うことにおいて、教会が人を聖化する目的をもっていることを教えた。また聖パウロは教会のことを「神の聖殿」と呼び、教会がキリストの上に、十二使徒の土台の上に建てられたもので、キリストがこの建物の隅石であられることを主張した。なお彼は教会の組織とその律法、および監督である者が教会をつかさどる権力については、チトおよびチモテオに送った書簡の中でしばしばこれを述べている。教会と言う言葉はまた一般の信者をさすだけでなく、教会の一部分である各地方の小団体を意味することもある。

▲契約の櫃　出エジプト記二十五章十節以下に見られるように、神の命令によって作られた櫃で、外部は純金の板でおおわれており、中にはモイゼが神からいただいた十戒の石板が収められている。これは神のおぼしめしを証するとともに、人民が約束した服従を証し、神と人民との契約を表わすものである。

▲ゲネザレトの湖　別名をチベリアデの湖、またはガリレアの湖と言い、やや卵形で、長さは約五里、巾は二里半である。湖は魚族に豊富で、普通は穏やかだが、時々、急にすさまじく荒れる湖である。

▲ケルビム　天使中でも、すぐれた階級に属する天使で、神の能力を表わす役者として神の能力を示すために描かれ、契約の櫃の上には純金をもって作られた二つのケルビムの像があった。

▲子　ヘブレオ語固有の語法によって聖書の中で種々の意義をもつ。

第一、出生上から、㈠実子。キリストが神の御子と言われるのはこの意である。㈡甥または孫（創世記9・8、31・28）。一般の子孫（マテオ1・1、20、3・9、23・31、27・25、マルコ7、27、ルカ1・17、3・8）。系図では数代を隔てた子孫であっても子と言うことがある。

第二、従属上から、㈠弟子である者、特に教育を受ける者をその師の子と言う(ヨハネ13・33、使徒行録7・21、コリント前書4・14、17、チモテオ前書1・2、チト書1・1)。なお慈愛をもってあしらわれる人も、そのあしらう人の方から子と言ったことがある（マテオ9・2、マルコ2・5、ルカ16・25)。

㈡臣民または他人に属する人をその君主の子と言い（列王記略下**16**・7）、従属を示すため頭首に対して自分をその奴隷の子と言い（詩編**85**・16）、身を悪魔にゆだね、またはその勧めに従う人を悪魔の子と言い（使徒行録**13**・10、ヨハネ一書**3**・10）、肉欲に従う人を肉の子と言う（ロマ書**9**・8）。

第三、出身上、その生国または故郷の名をとって、某所の子と言うこともある。

第四、類似的関係によって相続人を占有の子、注油された人を油の子、不幸に会っている人を困難の子、死に価する人またはまさに死なんとしている人を死の子と言う。ヤコボとヨハネとは、その熱烈さゆえにいかずちの子と呼ばれた。また日本で言う火の子を炎の子と言い、矢を弓の子と言ったこともある。

第五、道徳上から、㈠神に忠実である人を知恵の子（マテオ**11**・19）、平和の子（ルカ**10**・6）、光の子（ルカ**16**・8、エフェゾ書**5**・8、テサロニケ前書**5**・5）、従順の子（ペトロ前書**1**・14）、あるいは約束の子、すなわち約束を継ぐべき子（ロマ書**9**・8、ガラチア書**4**・28）と呼んでいる。㈡また悪人は、その悪業を、受けるべき刑罰によって怒りの子（エフェゾ書**2**・3）、不信の子（エフェゾ書**2**・2、**5**・6、コロサイ書**3**・6）、呪いの子（ペトロ後書**2**・14）、滅びの子（ヨハネ**17**・12、テサロニケ後書**2**・3）、地獄の子（マテオ**23**・15）などと言われている。

▲神の子ども　天使および人間を呼ぶのに、しばしばこの言葉を用いており、特に神から選ばれた人民をこう呼んだ。新約では、キリストの御血によって贖われ、恩寵によってキリストの兄弟とされたことから、信者はしばしば神の子どもと呼ばれた。また特に和睦させる人（マテオ**5**・9）、善をもって悪に報いる人（マテオ**5**・45、ルカ**6**・35）、および復活した善人（ルカ**20**・36）を、神の子どもと呼んだ。キリストは弟子たちに、神を彼らの父と呼び、祈る時にも父と呼ぶように命じ給うた。このように神の子どもと呼ばれるのは有名無実のことではなく（ヨハネ一書**3**・1、2）、神の賜ものであって（ヨハネ**1**・12）、その関係は養子縁組に似ており（ロマ書**8**・23、ガラチア書**4**・5、エフェゾ書**1**・5）、すべてこれは信仰と愛とによるものである（ガラチア書**3**・26）。それゆえ人は、神から子どもとしてあつかわれ（ヘブレオ書**12**・7）、神の霊によって導かれ（ロマ書**8**・14、15）、徳によって神の子どもとして恥ずかしくないように努めなければならない（フィリッピ書**2**・15）。

▲人の子　人の子と呼ばれるのは人間一般のことである。それにもかかわらずキリストは、マテオ書で三十一回、マルコ書で十四回、ルカ書で二十五回、ヨハネ書で十二回、ことさら

に自分を自ら人の子と言っておられ、決してほかの人をこう呼び給うたことがなかった。また使徒たちは人の子という語をキリストに用いないで、ただステファノが使徒行録で一回（使徒行録**7**・56）、ヨハネが黙示録で二回（黙示録**1**・12、**14**・14）用いているだけである。キリストが人の子と自称されたのはその人性が真のものであることを示されるためで、また神から遣わされ、予言者によって予言され、人民に待たれた人であることを表わされたのである。だから救い主として、または人となり給うた神として、あるいは神と人との間の仲裁者として話される時に、特に神の子と自称し給うたのである。すなわち神としては、神に似合わずへりくだり、あるいは苦しまなければならぬことを予言し給う時、また人としては、人に立派なことを言い、またはそれを行ない給う時、特にこの人の子と言う呼び名を使われ、人類の救い主または審判者に関することでは、その人性を超越する役目を果たし給うたのである。

▲ダヴィドの子　神御自ら特にダヴィドになされた約束により（詩編**131**・11、使徒行録**2**・29、30）また予言者がキリストをダヴィドの子と名づけたことから（エレミア**23**・5、**33**・15、17、エゼキエル**34**・23、ホゼア**3**・5）、ユデア人一般では救い主をダヴィドの子と名づけ、イエズス・キリストをこう呼んだ。

▲言葉　普通の言葉または事がらの意味。御言葉、神の言葉という時は、救霊を得させるはずの神の啓示、あるいは福音のみ教えを言う。また「み言葉」とは使徒ヨハネの福音書または書簡では神の第二位をさし、キリストにおいて現われた神性のことである（ヨハネ**1**・**1**）。

▲罪祭　罪の贖いとして、犠牲をほふって神に献げる祭。

▲再臨　人々を審判し、善悪を賞罰するために、キリストが世の終わりに再びこの世に来られることを言う。

▲酒　一般にぶどう酒をさす。使徒行録二章十三節にあるのは、干ぶどうで作った甘い飲み物のことである。禁酒を命じた言葉は聖書のどこにも見当たらない。ただ酔うことを戒められただけである。

▲サタン　「反逆」の意味で悪魔固有の名。人について言う場合、神のことを主義としないで悪魔の主義にいざなわれた者のことを言う。

▲サドカイ人　ユデア教の中で勢力のあった一派。ファリザイ人の迷信や厳格主義に逆らい、もっぱら唯物論をとなえ、霊魂の不滅、神霊の存在、復活等を否定し、ただ快楽に身を任かせて異教人同様の生活を送っていた。サドカイ人の多くは富豪で諸民を軽べつしたから人望がなく、キリストに抵抗していた。

▲サマリア　ガリレアとユデアとの間にあって、首府をサマリアまたはセバステと言った。名所としては、ヤコボの井戸

の付近にシケムがあり、また山ではエバル山とガリジム山がある。サマリア人はアッシリア地方から来た異邦人の子孫で、その宗教は偶像教とユデア教とを混合したものだった。サマリア人とユデア人との仲は悪く、ユデア教の根拠地であるエルザレムに反対するため、ガリジム山に礼拝所を設けていたが、彼らもまたメシアを待望していた。ユデア人はサマリア人を異教人と見なしたから、不信仰者や神を冒瀆する者をサマリア人と呼んだ。

▲**サムエル**　旧約時代の予言者の一人。サムエル上一〜十七章を参照のこと。

▲**サロモン**　ダヴィド王の子で、自分からダヴィドの後任者となった。彼は最も美麗な神殿を建て、その学識や徳行によって世の人々を驚かせたが、のちに堕落して偶像崇拝に陥った。

▲**サラ**　アブラハムの本妻で、老年に至るまで子どもがなかったが、天使の約束によってついにイザアクを生んだ。事は創世記二十一章を参照のこと。

▲**シオン**　エルザレムの建てかけられた一つの高地で、聖殿はこの上にあった。「シオンの娘」とは、エルザレムまたはエルザレムの住民をさした言葉である。

▲**時間**　昼を四大時に分け、更にこれを十二時間に小分けし、日の出を第一時、午前九時ころを第三時、正午を第六時、午後三時ころを第九時と呼び、日没の時を翌日の初めとした。そしてキリストの時代には夜間を四更に分け、第一更は午後九時ごろまで、第二更は夜中と言って十二時ごろまで、第三更は鶏が鳴くころといって午前三時ころまで、また第四更は夜明けまでであった。

▲**司祭**　アアロンの子孫で、至聖所に入ることはできなかったが、聖所に入って祭壇に仕え、各種の祭礼を行ない、朝夕、香台の上に香をたき、毎週、供えのパンを卓上にのせ、燔祭の祭壇に不滅の火を保ち、祭式の終わりに祝祷を唱えていた。

▲**司祭長**　大司祭を参照のこと。

▲**使徒**　イエズス・キリストが布教のために特に選抜して派遣された十二人。使徒の名はマテオ十章二〜四節にある。十二使徒中の一人ユダは、イエズスを敵に売り失望して自殺したので、キリストご昇天後、使徒たちはユダの代わりとしてマチアを選んだ。なおパウロとバルナバとは十二使徒ではないが、聖霊の命令によって布教の任に当たったため（使徒行録13・2）、また使徒行録十四章四、十三節で特に使徒と呼ばれたところから、聖会でもまた、この二人を使徒と呼ぶ。

▲**シナイ**　アラビアにあって、モイゼが神から十戒と律法とを受けた山。

▲**詩編**　旧約聖書の一つで、いろいろの詩を百五十編集め

たもの。その大部分はダヴィド王の作である。

▲衆議会　エルザレムには大衆議会が、その他の各所には小衆議会があった。大衆議会は全員七十一人で、大司祭、長老、および律法学者によって組織され、会長はたいてい大司祭であった。ユデアがロマ領に入らないころは、宗教上、政治上、その他公私の大問題を議決し、法律を定め、宣戦講和の権、偽予言者裁判権、死刑宣告の権までも、この大衆議会がもっていたが、ロマ領となってからは、その勢力を失い、ただ宗教上の問題だけをあつかうこととなった。

▲十分の一　旧約時代、神の命令によって、一般人民は毎年農畜産物から得る収入の十分の一をレヴィ族の人々に納める掟があった。そしてレヴィ人は自分の歳入の十分の一を司祭に献納し、司祭はこれと祭礼の供物とによって生活していたのである。

▲主の使　天使を参照のこと。

▲殉教者　原語では「証人」を意味し、神のため、あるいは神の教えを証明するために生命を捨てた人を言う。

▲贖罪所　契約の櫃のふたである純金の板。その上に二つのケルビムの像があった。神がモイゼに命令をおくだしになる所、または神の玉座のようなものとされていた。毎年、贖罪の祝いがあって、大司祭は至聖所に入り、犠牲となった牡牛の血の中に指をひたして、その血を贖罪所の全面にふりかける式があった。

▲神殿または聖殿　サロモン時代すなわちキリスト降生前十世紀にあたって最も美麗に建てられた聖殿はアッシリア人のために滅ぼされ、キリスト降生前七世紀ごろゾロバベルの時代に再興されたが、前の壮麗な神殿に比べると、そのおもかげさえもなかったので、キリスト降生前三十年ころ大王と言われたヘロデは、一万八千の職工を使い、約三十年間かかりこれを改築装飾した。それゆえユデア教の唯一の礼拝所として最も尊ばれ、真神のみ堂として非常にあがめられた。神殿には、石だたみの庭が数カ所あって、奥に進むほど次第に高くなっており、階段によって互いに連なっていた。第一の庭を外殿または異邦人の庭と言って、だれでも自由に出入りでき、犠牲に供える牛、鳩などを売る店や両替屋の店などがあり、律法学士の議論、相談などもまたここでされた。まわりには柱で支えられた廊があって、その東方のが有名なサロモンの廊であった。第二の庭はイスラエル人の庭で、もし異邦人がここに入ろうものなら、その人は死刑に処せられていた。この第二の庭は二つに分けられており、一方を男の庭、片方を女の庭とし、周囲の三方には種々の室が設けられており、女の庭には、福音書にしるされているように、さいせん箱があった。更に一段高い所は司祭の庭で、

燔祭の祭壇があり、その奥は直接聖殿に接していた。ここで、司祭は犠牲をほふり、民を祝福し、また賛美歌や詩を歌った。更に一段高い所に聖殿があって、ここはもっぱら司祭が祭式を行なう所だった。殿は西に面し、まず表に広い廊があり、その奥に幕屋があって、これを「聖所」と言い、ここには七枝の金の燭台と供えのパンの金の卓、および金の香台とがあった。更に奥に進むと、また一つの幕屋があって、これを「至聖所」と言い、大司祭だけが一年に一度ここに入ることができた。ここにはもと契約の櫃があったが、イスラエル人がバビロネに流罪され、初めて聖殿が破壊された時に紛失したと言われている。

▲審判　神が人の死後その善悪を裁き給うことで、審判には二種類ある。すなわち各自の死後すぐに受ける私審判と、世の終わりに全人類が公然と一緒に受ける公審判の二つである。

▲過ぎ越し　イスラエル人民は四百二十年の間、エジプトの国で奴隷のように取りあつかわれ、この圧制をのがれようとしたが許されなかったので、ついに神は、モイゼに、小羊をほふり、その血をイスラエル人の家の門に塗らせるようお命じになった。夜中になると天使が来て血の印のある家を「過ぎ越し」てエジプト人の長男を全部殺し、こうしてイスラエル人たちは神の御助けによってエジプトを去った。それゆえ過ぎ越しの祝いには、神のご命令で、この事件を記念し、ユデア教の一大祝祭として毎年八日間行なわれ、過ぎ越しの小羊を食する式があった。聖書の原文に「過ぎ越しを行なう」とあるのは、その祝いを行なうこと「過ぎ越しを準備する」とあるのは、その食事を準備すること、また「過ぎ越しをほふる」あるいは「これを食する」とあるのは、その祭の小羊をほふり、あるいは食することを言うのである。

▲ストイック　苦楽を顧みず毅然として道徳を守り、心を動かさず感情に打ち勝つことを主義とする哲学の一派。

▲隅石　家の四隅に置かれ、両側の壁を支えるために用いられる石のこと。だから特に大きな石を選んで用いるのが普通であった。人民、特に旧約の選民や新約の教会は、しばしば家にたとえられる。この場合に頭首または大人物を隅石と呼び、新約では特に教会のいしずえであり頭首であられるキリストを隅石とお呼びする。

▲聖　(一)徳の極みのことで、神について言う場合には、神の稜威の万徳を備えて最も清くかつ尊ぶべきことで、人について言う場合には、神の御徳にならって、ひたすら罪を避け神のみ心にかなうよう徳行を積むことである。ただし旧約では、律法上の汚れのないこと、あるいはその汚れを清められることを言った。また「成聖」とは、旧約では律法上の汚れを清めることを言い、新約では罪をすべて許し恩寵を授ける神の御恵みの

ことを言う。(二)なお神に直接の関係を有するものを「聖物」と言って、たとえば常に神を礼拝するために用いられる所を「聖所」人を神の道に導く務めを「聖役」、神感による書籍を「聖書」と言う。人の場合をあげると、キリストを生み給うた御母を「聖母」と申し上げ、神のみ心にかなって、すでに終わりのない栄福をこうむっている人を「聖人」と言う。またキリスト御自ら建て給うた教会を「聖会」と言い、キリスト信者は終わりのない幸福を受けるよう努力するために召されたところから彼らを「聖徒」と言う。

▲聖役　聖の(二)を参照のこと。

▲誓願　命令ではない善業を特に行なおうとして神に対してなす約束。

▲聖所　神殿を参照のこと。

▲聖人　聖の(二)を参照のこと。

▲聖殿　神殿を参照のこと。

▲聖徒　聖の(二)を参照のこと。

▲聖霊　三位一体の神の第三位を聖霊とお呼びする。

▲ゼロテ　「奮発者」の意味で、十二使徒中のシモンに与えられた名前である。マテオおよびマルコの福音書ではカナネオと訳されているのに、ルカ福音書ではゼロテと言っている。これは、もしかしたらゼロテと呼ばれたユデア教の一派に属していたためか、そうでなければ神への奮発が特に目立っていたためであろう。

▲洗礼　洗者ヨハネは改心の印として洗礼を授けたが、キリストは洗礼によって罪を許され教会会員となり、成聖の恩寵をこうむる印としてお定めになった。洗礼を授ける方法に三種類ある。すなわち浸水と注水と灑水との三つである。初めは主に浸水すなわち全身を水中に浸す方法が用いられ、こうすることによって洗礼がキリストの死またはその葬りをかたどり、信者を再生させるものとしたのである。

▲族　聖書中に十二族などとあるのは、太祖ヤコブの十二子から出たイスラエル人民の主な支族であって、その名は黙示録七章五～八節に見られる。たとえばレヴィ族とあるのはレヴィの子孫で、ベンヤミン族とあるのはベンヤミンの子孫である。

▲ソドマ　ゴモラ、アダマ、セボイムの町々とともに、淫乱のはなはだしい罪が行なわれていたため、天罰として火と硫黄の雨によって滅ぼされた町。創世記十九章を参照のこと。

▲供えのパン　神のご命令によって、絶えず契約の櫃の前の机にのせて献げた十二個のパン。このパンは純粋の小麦粉をもって作られた。

▲大司祭　モイゼの兄アアロンの子孫である一族の長で、祭礼や宗教上の事務をつかさどり、自分から美服をまとって祭

主となり、年に一回至聖所に入ることができ、また衆議会の会長であった。大司祭の務めは終身官であったが、ヘロデの時代になって国王の思うままに廃立され、ヘロデは七人、ヘロデの後任者は三人、総督は七人の大司祭を任命して、百五年間に三十人も更迭された。しかし大司祭の名義だけは失われなかった。

▲ダヴィド　ベトレヘムに生まれ、キリスト降生前十一世紀にイスラエル国の王となった。詩編の大分部はダヴィドの作で、キリストの先祖中に数えられた人である。サムエル下の一〜二十四章を参照のこと。

▲種なしパン　いわゆる過ぎ越しの時、イスラエル人が、しいられてエジプトを去るにあたって、種でパンをふくらすひまがなかったので、このことを記念するため過ぎ越し祭の八日間は種なしパンを食べた。それで過ぎ越し祭を種なしパンの祝いとも言ったのである。

▲ダマスコ　シリア国の首府で、小アジアの都会中、屈指の都であった。

▲長老　民間の富有で勢力ある家から選ばれ衆議会の議員となった者のこと。キリスト教会では、各地の教会をつかさどって信者を指導する任務を帯びる者を長老と呼んだ。これは初代のころはまだ旧約の司祭がいた関係上、教会の長老を司祭と呼ぶのにさしつかえたからである。しかしのちには公教会で長老のことを司祭と名づけた。

▲注油　オリーブ油を注ぎ、あるいは塗る儀式で、神職すなわち大司祭、司祭、予言者、イスラエル国王等の位に任命する時に行なわれた。それは、このオリーブ油がよくものにしみとおって広がり、食用に、料理に、燈火に、薬用に、またものを柔らげるために用いられたところから、聖霊の恵みを授けられる印としたのである。したがって神の霊を授かる時には、有形的注油の有無にかかわらず注油をこうむると言われた。(イザヤ45・1、61・1)。新約では聖霊の賜ものを授かることを注油と呼び、キリストは弟子に病人をいやさせるため注油されたのである。なお終油の秘跡にもこのオリーブ油が用いられることは、聖ヤコボの聖書で明らかである。

▲地理　福音書で事実の舞台となった地は、地理学者からパレスチナと呼ばれ、列王時代まではカナアンの地、サウロ王の時代からはイスラエルの地、予言者たちの書にはエホヴァの地または聖地と呼ばれていたが、バビロネに流刑されてからキリストの時代までは、ユデアと呼ばれた。西アジアの極端に位し、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの三大州に隣接する小国である。長さは約五十五里、巾は約十六里で、ヨルダン川によって、二つに分けられる。西部はガリレア、サマリア、ユデアの三国からなり、東部はヨルダン川のかなたの地、あるいはペレアと

も言われ、ヨルダンとアラビア砂漠との間に介在している。

▲**罪**　神の掟または自分の義務を知りつつ故意にそむくこと。罪には大罪と小罪の二種類がある。大罪は神の恩寵を失わせ、地獄の苦罰に処せられ、悔悛をもって許される。小罪は神に捨てられ地獄の罰に処せられるところまではいかぬものの、神に対する愛を冷やし徐々に大罪へと導くのである。また聖霊に反する罪とは、わざと真理に抵抗することである。今世来世ともに許されないと言われるのは、真理に抵抗する人は決して救霊を得る道がないからである。

▲**天**　または青空と言い、神と天使と聖人方とが住み給う所のことや、あるいは神を見奉って終わりのない幸福を得ることを言う。これは神が特別の所に住み給うからではなく、どこにも神の存在し給わぬ所はないが、人々の想像に訴えて神の広大無辺な御徳を悟らせるためには、どうしても「天」と言う言葉よりもすぐれた言葉がないためである。

▲**天国**　神の国を参照のこと。

▲**天使**　天使は純霊で、神の使や人の守護者となり、ある時は形をもって現われ、神の御告げなどを人に告げるもの。しかしこれは善天使のなすことで、天使の中には堕落して悪魔となったものもあり、これを悪天使とも言う。悪魔を参照のこと。

▲**肉**　聖書では、あるいは肉身全体を、あるいはその肉だけを、あるいは人の間の親密な関係を、あるいは人類を、あるいは人の浅ましさ、人の悪欲などのことを言う。「肉に従って生活する」とは、いわゆる肉欲に従うことを言い、「肉の欲」とは肉がおのずと欲することを言うのではなく、人の劣等な欲を言うのである。

▲**ニニヴェ**　アッシリア国の都会でチグリス川の岸にあった。悪徳が流行したため神に滅ぼされようとしたのを、予言者ヨナが神命によってこのことを布告したので、人民はみな改心し禍いをまぬかれた。事はヨナ書を参照のこと。

▲**ノエ**　大洪水の前に箱舟を作るよう神から命ぜられて、一家族八人とともに大洪水をまぬかれて生きながらえた人。事は創世記六〜九章を参照のこと。

▲**パウロ**　もとサウロと呼ばれたが、奇跡的に改宗し、聖霊から布教の命令を受け、クプロ島で総督セルジオ・パウロを改宗させたおり、その記念として、パウロと改名したと言われる。使徒行録十三章を参照のこと。

▲**パトモス**　エーゲ海にある小島で、使徒ヨハネの流された所。

▲**バビロネ**　イスラエル人民が天罰として流されたバビロネ国の首府。バビロネは悪徳がはなはだしく流行したところから、ロマもバビロネの名をもって呼ばれた。

▲バラアム　モアブ国王バラクに召されて、イスラエル人民を呪うためにいざなわれた予言者。民数紀略二十二～二十四章を参照のこと。

▲燔祭　獣をほふってこれをきざみ、神の最上権を表わすためにその全体を焼きつくす祭式で、献祭の最も完全なものである。日々朝夕、または特別の場合に献げられた。

▲羊　最も温和な動物であるため、キリストは信者が守らなければならない徳を示すために羊という名前をもって信者を呼び、信者をつかさどる者を牧者と言われ、み国の平和なことを示し給うたのである。

▲小羊　よく犠牲として小羊が献げられたところから、キリストもこれになぞらえて「神の小羊」と言われ、また一般の信者もこの名をもって呼ばれた。

▲人の子　子を参照のこと。

▲ファリザイ人　ユデア教の主なる宗徒で、表面では律法を厳重に守り律法の命令のささいな点までも人にこれを命じながら、自分では反省することもしないで愛を守らず、人を軽べつし、口で宣言しつつ身をもって掟を守ろうとせず、利益と自慢心にふけり、偽善を装っていた。彼らは、もっぱらキリストに敵対する者であった。

▲ベエルゼブブ　悪鬼を参照のこと。

▲ペトロ　ヘブレオ語の「ケファ」の訳語で「岩」の意味である。キリストが十二弟子中の第一であるシモンをペトロと名づけ給うたのには理由があった。すなわちこれはペトロの気質を表わすものではなく、彼を特に選んでキリストご自身の教会の土台とされることを示し給うたのである。

▲ベトレヘム　ユデア国の町でダヴィド王の誕生地。イエズス・キリストも予言に応じてベトレヘムで生まれ給うた。

▲ヘブレオ　ヘブレオ書の序言を参照のこと。

▲ペレア　福音書では、ヨルダン川のかなたの地と言われており、川の東岸に沿った地方で、北はフィリッピのカイザリア、東はアラビア砂漠、南は死海に接し、コウラニチド、イチュレア、トラコニチドなどの五郡に分かれ、住民の大多数は異邦人であった。

▲ヘロデ　新約聖書にヘロデと言う人が四人出て来る。㈠キリスト降誕当時、統治していたヘロデは大王と呼ばれたが、ただ、同名の人に対してこう言ったにすぎず、別に大王と呼ばれるような価値のある人物ではなかった。約四十年間王位につき、その惨酷さによって有名で、近親や長男までも殺した人である。㈡ヘロデ・アンチパスはヘロデ大王の子どもで、紀元前四年から紀元後三九年までガリレアおよびペレアを治め、洗者ヨハネを殺し、ご受難の時、キリストをあざけった人である。

㈢ヘロデ・フィリッポはヘロデ・アンチパスの兄弟で、ヘロディアデの第一の夫。㈣ヘロデ・アグリッパ一世はヘロデ大王の孫。使徒行録第十二章に見られるように教会を迫害し、使徒ヤコボを殺し、ペトロを捕えた人。

▲**ヘロデ党員**　よくファリザイ人と協力してイエズス・キリストを滅ぼそうと努めた政治上の党派。

▲**ペンテコステ**　「五十」の意味で、イスラエル人は過ぎ越し祭ののち五十日目に麦の収穫の終わりを祝い、新麦で作ったパンを神殿に献げて祭を行なった。またモイゼが律法を布告した年期にも当たる。聖霊降臨がこのペンテコステの日に当たったところから、この日を新約聖会の開始の日とする。

▲**奉殿記念祭**　アンチオクス王のために汚された聖殿が、ユダ、マカベオの時代すなわちキリスト降生前一六八年に清められ、祭壇が新たに建てられたのを記念して八日間行なわれた祭。

▲**ホザンナ**　「助け給え」の意味で、歓迎の声。

▲**滅びの子**　滅ぼされるはずの子の意。滅びに至るはずの者をさす。

▲**幕屋**　幕を張って仮の住居としたもの。また身体を形容する言葉として用いられた。モイゼの時代からサロモンがエルザレムに聖殿を建てる時に至るまで、礼拝所として幕屋を用いた。

▲**幕屋の祭**　秋期にあたって八日間、かつて祖先が四十年間砂漠の中に幕屋住居したことを記念してユデア人の行なった祭。この八日間中は、しばで作った幕屋に住み、農産物の刈り入れの終結と祖先の流浪生活の終結とを祝った。

▲**マンナ**　イスラエル人民が荒野をさまよった間、神が四十年間毎日天から降らし給うた食物で、新約における聖体の秘跡の前表であった。事は出エジプト記十六章を参照のこと。

▲**税吏**　他国人であるロマ人に使われて、ロマ人のために同邦人から租税を取りたてることを職業とし、納税を責めうながすことが苛酷だったため、一般人民の憎悪を買い、当時、税吏と言えば盗人と言うのと同じほどであった。

▲**名字**　名字と言うものがなかったため、まぎらわしい名の時には、男の場合にはその父の名を添えて呼び、たとえばシモン・ペトロをヨナの子と呼んだ。またその出身地の名を添えて呼ぶこともあり、アリマテアのヨゼフとか、シレネのシモン、マグダラのマリアなどはその好例である。女の場合にはその夫の名を添えて呼び、一例をあげればクレオファのマリアなどがそれである。

▲**メルキセデク**　アブラハムの時代にサレムの王で、また神の司祭だった人。パンとぶどう酒とを献げてアブラハムを祝

福したことからキリストの前表とされる。事は創世記十四章十節以下、およびヘブレォ書七章以下を参照のこと。

▲モイゼ　旧約の律法および政治上・宗教上のことを規定して布告し、イスラエル人民をエジプトより救い出し、かつ彼らを治めるために、神が特に任命し給うた人。事は出エジプト記を参照のこと。

▲ヤコブ　イザアクの子で、十二族の太祖となった十二人の子どもの父。事は創世記二十五〜五十章を参照のこと。

▲ユデア　大方ユデア教を奉じている人々の住んでいる所で、その都はエルザレムである。エルザレムから十町離れた所にかんらん山が、三十町の所にベタニアが、また二里離れた所にはベトレヘムがある。そのほかヘブロン、エリコ、アリマテアがあり、海岸にはカイザリア、リッダ、ヨッペがある。ヨッペはエルザレムの港で、現在はジャファと呼ばれている。

▲予言　文字が示すように、あらかじめ未来を告げることだけでなく、神の特別の恵みによって、一般の人が理解できない神意を悟ってこれを説明することを言う。

▲予言者　神の特別の恵みによって、ある時は神のみ旨を悟って人々をさとし、ある時は未来のことをあらかじめ告げる任務に当たった者。旧約時代の主な予言書を残した者は十六人で、そのうちイザヤ、エレミア、エゼキエル、およびダニエルを四大予言者と言う。他の十二人の小予言者はオゼア、ヨエル、アモス、アブジア、ヨナ、ミケア、ナホム、ハバクク、ソフォニア、アッゲオ、ザカリア、マラキアである。

▲ヨナ　予言者で、ニニヴェ人に改心を勧めることを神から命ぜられ、この任をのがれようとしたが難船に会い、三日の間大魚の腹の中にいてやっと救われ、この事件はキリストご復活の前表となった。事はヨナ書を参照のこと。

▲ヨルダン　ヘルモン山から発して真直に流れ、チベリアデの湖を通ってパレスチナ全国を縦貫し死海に注ぐ川。

▲ヨズエ　ヨズエはまたイエズスとも呼ばれ、モイゼの後任者としてイスラエル人民を導き治め、神の約束された地方に入らせた人である。事はヨズエ記を参照のこと。

▲律法　モイゼが神命によって布告した種々の掟。その骨髄は神の十戒で、他は倫理、儀式、社会の風俗および制裁、刑罰に関するものである。しかもこの儀式、風俗などの掟は永久的なものでなく新約の予備となるもので、新約が出るとともに廃止された。この旧約の法が畏敬の法と呼ばれたのに対し、人を救霊に導くためにキリストから与えられた新約の法は新法または恩寵の法、あるいは新約と言われた。

▲律法学士　宗派ではなく役人の名称である。もとは聖書を写し保存することが役目であったが、いつしか聖書を解釈す

る者となり、なお教場で教え、人々の間の契約をしたため、公正証書を作成し、会堂で説法をするなど、人民の教導職となった。たいてい彼らはファリザイ派に属し、これと同主義を奉じ、傲慢で利をむさぼり、しいて律法を曲解し、しばしばイエズス・キリストに譴責された者である。

▲レヴィ人　聖所に入ることを許されず、司祭の命令を受けて聖殿に奉仕し、門の開閉や一般の掃除などを受け持ち、また供えのパンを作る者であった。

▲レヴィ族　神は旧約において祭礼を行なわせるため、十二族の中からレヴィ族の人々を選ばれて、大司祭、司祭、およびいわゆるレヴィ人の務めを任命された。

主人の義務 ……………エフェゾ書6・9，コロサイ書4・1
従僕の義務 ……………エフェゾ書6・5～8，コロサイ書3・22～25，ペトロ前書2・18～25

罪

原罪 ……………………ロマ書5・12，15～19，コリント前書15・21，22，エフェゾ書2・3
大罪および小罪 ………ロマ書8・13，ガラチア書5・19～21，エフェゾ書5・5，ヤコボ書1・15，3・2，黙示録21・8，ルカ6・41，ヨハネI書1・8
聖霊に反する罪………マテオ12・22～37，マルコ3・22～29，ルカ11・15～23，使徒行録7・51
言葉の罪 ………………マテオ12・36，ヤコボ書3・2～12
心の盲目 ………………マテオ15・14，23・16，19，24，26，黙示録3・15～19
良心に反しないこと …ロマ書14・22，23
自慢してはならない …ロマ書12・3
しっと …………………ヤコボ書3・13～18
悪い交際を避けること ロマ書16・17，コリント前書5・9～11，コリント後書6・14，テサロニケ後書3・6，14，チト書3・10
罪を戒められる ………ヨハネ5・14，8・34，15・22～24，ロマ書2・12，6・2～14，コロサイ書3・5～9，チモテオ前書5・22，ヘブレオ書3・13，10・26，12・1～4，ペトロ前書2・24，ヨハネI書1・8，2・1，3・4～9，5・16，17
誘惑 ……………………マテオ6・13，26・41，マルコ14・38，ルカ11・4，22・40，コリント前書7・5，10・13，ヘブレオ書2・18，ヤコボ書1・2，12，14，ペトロ後書2・2
私欲 ……………………ロマ書6・12，7・14，23，25，コリント前書10・6，ガラチア書5・17，24，コロサイ書3・5，ヤコボ書1・14，15，4・1
讃美歌 …………………エフェゾ書5・19，コロサイ書3・16

社会における従順 ……ロマ書13・1〜10，ペトロ前書2・13〜17
教会における従順 ……マテオ16・17，18，28・20，ルカ10・16，エフェゾ書4・11〜16，ヘブレオ書13・17，ペトロ前書5・5
有名無実の信者 ………マテオ7・21〜23，ルカ13・25〜30，ヤコボ書1・26，27
幸いな者 ………………マテオ5・3〜12，ルカ6・20〜23，11・27，28，ヤコボ書1・12，黙示録14・13
祈りの効果 ……………マテオ7・7〜11，18・19，21・22，マルコ11・24，ルカ11・9〜13，18・1〜7，22・40，46，ヨハネ14・13，14，15・7，16・23，24，ロマ書8・26，エフェゾ書6・18，5・16〜18
断食の例 ………………マテオ4・2，9・15，マルコ2・20，9・28，ルカ5・35，使徒行録13・3，41・22，コリント後書6・5，11・27
常に喜ぶこと …………ルカ10・20，コリント後書13・11，フィリッピ書3・1，4・4〜7，テサロニケ前書5・16，エフェゾ書5・18〜20，ヤコボ書1・9，10
患難においても喜ぶ …マテオ5・11，12，ルカ6・22，23，ロマ書5・3，コリント後書7・4，8・2，コロサイ書1・24，ヘブレオ書10・34，ペトロ前書1・6，7，3・14，4・12，13，ヤコボ書1・2〜4
満足することを知れ …フィリッピ書4・11，チモテオ前書6・6，8，ヘブレオ書13・5

社会に対する義務

家庭における義務 ……エフェゾ書5・22，6・9，チモテオ前書5・8
夫の義務 ………………コリント前書7・3，4，エフェゾ書5・25〜32，コロサイ書3・19，ペトロ前書3・7
妻の義務 ………………コリント前書11・7〜10，エフェゾ書5・22〜24，33，コロサイ書3・18，チモテオ前書2・15，5・14，チト書2・4，5，ペトロ前書3・1〜6
離婚のいけないこと …マテオ5・31，32，19・3〜12，マルコ10・2〜11，ルカ16・18，ロマ書7・1，2，コリント前書7・10，11，30，エフェゾ書5・31，32，テサロニケ前書4・3〜8
ほんとうの寡婦 ………チモテオ前書5・3〜15
婦人の飾り ……………チモテオ前書2・9，10，ペトロ前書3・3〜5
教会における婦人 ……コリント前書11・3〜16，チモテオ前書2・11〜15
婦人のおおい …………コリント前書11・3〜16
親の義務 ………………エフェゾ書6・4，コロサイ書3・21，チモテオ前書5・8，チト書2・4
子どもの義務 …………エフェゾ書6・1〜3，コロサイ書3・20

ヨハネI書4・20, 21, 5・1
愛の二点……………マテオ22・37〜40, マルコ12・28〜34, ルカ10・2〜28
愛の程度……………マテオ5・21〜24, 7・12, マルコ11・25, 26, ルカ6・30, 31, 35〜38, ヨハネ, 15・12〜14, エフェゾ書5・2, コロサイ書3・12〜14
愛の結果……………マテオ10・42, 18・6, 25・40, マルコ9・41, ロマ書8・28, コリント前書9・22, 13・4〜8
敵に対する愛………マテオ5・43〜48, ルカ6・27, 28, 32〜36, ロマ書12・17〜21, テサロニケ前書5・15
復讐してはならない…マテオ5・38〜47, ルカ6・29, 30, ロマ書12・19〜21
互いに許し合うこと…マテオ5・24, 6・12, 14, 15, 18・21, 22, 35, マルコ11・25, 26, ルカ11・4, 17・3, 4, エフェゾ書4・32, コロサイ書3・13
愛の実例……………ロマ書12・9〜18, コリント前書9・19〜22, 10・24, 31〜33, コリント後書6・11〜13, 11・28, 29, ガラチア書5・13〜15, 6・2, エフェゾ書4・2, 25〜28, 31, 32, 5・1, 2
兄弟的説諭…………マテオ18・15〜17, 7・3, ルカ6・41, 17・3, 4, コリント後書2・6〜8, ガラチア書6・1, 2, テサロニケ前書5・14, チモテオ前書5・1, チモテオ後書2・24, 25, 4・2, ヤコボ書5・19, 20
施し…………………ロマ書12・8, 13, コリント後書8, 9, チモテオ前書6・17〜19, ヘブレオ書13・16
善業の必要…………マテオ5・11, 12, 10・42, 16・27, ロマ書2・6, コリント後書9・8, フィリッピ書4・8, 9, コロサイ書1・10, ヘブレオ書10・24, 13・21, チト書3・8, ペトロ前書3・9〜17, ペトロ後書1・10, 11
人の徳を立てること…ロマ書12・17, 14・19, 15・2, コリント前書14・26, コリント後書12・19,
良い模範となること…マテオ5・16, コリント後書2・15, 8・20, 21, テサロニケ前書5・15, ヘブレオ書10・24, 25
徳の真偽……………マテオ6・1〜18
希望は確信に至らない ロマ書11・20〜22, コリント前書9・27, 10・12, フィリッピ書2・12, 13, 黙示録3・11
謙遜…………………マテオ18・3, 23・12, ルカ9・48, 18・14, コリント前書4・6, 7, コリント後書3・5, ガラチア書6・3, エフェゾ書4・2, フィリッピ書2・3, 5, 13, コロサイ書3・12, ヤコボ書4・6, ペトロ前書5・5, 6

水をもって授ける……ヨハネ3・5，22，23，使徒行録8・36〜38，10・47，48，エフェゾ書5・26，ヘブレオ書10・22，ペトロ前書3・20，21

洗礼の結果……使徒行録2・38，22・16，ロマ書6・3，4，チト書3・5，6，ヨハネ3・5，マルコ16・16，ガラチア書3・27，28，コロサイ書2・12，ペトロ前書3・21

堅信の約束……ヨハネ7・39，15・26，27，16・13，14，ルカ24・49，使徒行録2・38

堅信の実例……使徒行録8・12〜18，19・1〜6，コリント後書1・21，22

堅信の結果……使徒行録8・17，18

赦罪権……マテオ16・19，18・18，ヨハネ20・21〜23

罪の告白……マテオ3・6，使徒行録19・18，ヤコボ書5・16，ヨハネI書1・9

贖宥の例……コリント後書2・6〜10

聖体の約束……ヨハネ6・26〜47

聖体の性質……ヨハネ6・56，コリント前書10・16，11・24，25，27，29

聖体はイエズスの御血肉……ヨハネ6・48〜59，マテオ26・26，マルコ14・22〜24，ルカ22・19，コリント前書10・16，11・27

御血肉は相離れない…ロマ書6・9，コリント前書11・27

聖体拝領の結果……ヨハネ6・54，57，58

ふさわしい聖体拝領…コリント前書11・27，29〜31

聖祭……使徒行録13・2，コリント前書10・16〜21，ヘブレオ書13・10

叙品式……使徒行録6・6，13・3，14・22

按手礼の結果……チモテオ前書4・14，チモテオ後書1・6

終油の秘跡……ヤコボ書5・14，15

道　徳

信仰の必要……マルコ16・16，ヨハネ20・29，使徒行録2・36，4・12，ロマ書1・7，11・20，ガラチア書5・6，エフェゾ書6・16，ヘブレオ書10・38，11・6，ヨハネI書5・4

善業を伴なわぬ信仰…ヤコボ書2・14，17〜24，26

信仰より愛……コリント前書13・13

信仰は愛に生かされる ガラチア書5・6

愛の必要……コリント前書13，16・14，ロマ書13・10，ガラチア書5・14，コロサイ書3・14，チモテオ前書1・5

愛の掟……ヨハネ13・34，35，15・12〜17，ペトロ前書1・22，4・8，ペトロ後書1・7，ヨハネI書3・11〜14，23，ヨハネII書5〜7，ロマ書13・8〜10，ガラチア書5・13〜15，6・2，テサロニケ前書4・9，ヤコボ書2・8，，ヘブレオ書13・1，

体の組織に類似 ………コリント前書12・12〜27，エフェゾ書4・15，16，ロマ書12・4，5
真理の柱，真理の基 …チモテオ前書3・15
教会の裁判 ……………マテオ18・17，18，使徒行録15・28，41，16・4，5，コリント前書5・3〜5，チモテオ前書1・20
教会の一致 ……………ヨハネ10・16，17・21〜23，使徒行録4・32，ロマ書15・5，6，コリント前書1・10，エフェゾ書4・3〜6，フィリッピ書1・27，2・1〜4，チト書3・10，11
異端 ……………………マテオ18・17，18，ロマ書16・17，コリント前書1・10，ガラチア書1・8，9
破門の例 ………………コリント前書5・3〜5，チモテオ前書1・20
教会の職員 ……………マテオ16・18，19，18・17，18，28・18〜20，ルカ10・16，ヨハネ14・16，17，26，16・13，20・21，コリント前書12・28，コリント後書5・20，エフェゾ書4・11〜16，ヘブレオ書13・7，17，ヨハネI書4・6
教会職員の責任 ………ヘブレオ書13・17
教会職員への義務 ……ヘブレオ書13・7，17，ペトロ前書5・5，6，ガラチア書6・6，テサロニケ前書5・12，13
信者の一致 ……………マテオ18・20，ヨハネ17・11，21，22，使徒行録2・44，4・32，12・5，フィリッピ書2・2，コロサイ書3・12〜15，ロマ書15・5，6，コリント前書2・12，エフェゾ書4・15，16
信者の武器 ……………ロマ書13・12，エフェゾ書6・10〜17，テサロニケ前書5・8
異教人に対する義務 …エフェゾ書4・17，フィリッピ書2・14，15，ペトロ前書2・7〜10，12，15，21〜25，3・8〜17

聖　書

聖書の利益 ……………ロマ書15・4，コリント前書10・11，エフェゾ書6・17，チモテオ後書3・16，ヘブレオ書4・12
悟りにくいこと ………ペトロ後書3・16
曲解されること ………マテオ15・3〜6
曲解の危険 ……………ペトロ後書3・16
個人解釈の非 …………ペトロ後書1・20，21
聖書に記されぬことが多いこと ………………ヨハネ20・30，21・25
聖伝のあること ………コリント前書11・2，34，ガラチア書1・8，テサロニケ後書2・14，3・6，チモテオ後書1・13，2・2，3・14

秘　跡

洗礼の必要 ……………マテオ28・19，マルコ16・16，ヨハネ3・5，使徒行録2・37，38，8・36〜38，9・18，10・47，48，19・4，5

に給う ……………………マテオ1・21, 20・28, 26・28, マルコ10・4, 5, 14・24, ルカ9・56, 22・20, ヨハネ3・16, 17, ロマ書5・15〜21, 14・15, コリント前書8・11, コリント後書5・14, 15, エフェゾ書1・7, コロサイ書1・13, 14, 20, チモテオ前書1・15, 2・6, 4・10, チト書2・14, ヘブレオ書2・9, 5・9, ペトロ後書2・1, ヨハネI書1・7, 2・2, 3・5, 8

司祭職 ……………………ヘブレオ書5・1〜10, 7・15〜17, 23〜28, 9・11〜14

キリストを宣言すること ……………………マテオ10・32, 33, マルコ8・38, ルカ9・26, 12・8, 9, チモテオ後書2・12, ヨハネI書2・22, 23, 4・2, 3

キリストの模範 ………エフェゾ書5・1, 2, フィリッピ書2・5〜11, ヘブレオ書12・2〜4, ペトロ前書2・21〜25, 3・18

キリストを知ること …コリント前書2・2, エフェゾ書3・18,19, フィリッピ書3・7〜14, コロサイ書2・2, 3, ペトロ後書3・18

キリストに従うこと …マテオ10・38, 16・24, マルコ8・34, ルカ14・27, ヨハネ13・15, ロマ書13・14, フィリッピ書3・18〜21, ヘブレオ書13・13, ペトロ前書2・21

百倍の報い ……………マテオ19・29, マルコ10・29, 30, ルカ18・29, 30

キリストと一致すること ……………………ヨハネ6・57, 15・1〜11

キリストに対する苦しみ ……………………使徒行録5・41, ペトロ前書2・19〜21, 3・14, 4・13〜16, マテオ5・10〜12

キリストを愛すること コリント前書16・22, コリント後書5・14, ロマ書8・35〜39

聖霊 ……………………ヨハネ14・16, 17, 26, 15・26, 16・7〜8, 13〜15, 使徒行録1・5, 2・1〜4, 5・3, 4, 20・28, ロマ書8・9〜11, 14〜16, 26, コリント前書3・16, 6・11, 19, 12・3〜11, ガラチア書4・6, エフェゾ書4・30

教　会

絶えないこと …………マテオ16・18, 28・10, ヨハネ14・16

悪魔に負けないこと …マテオ16・18, 28・19, 20, ヨハネ14・16, 17, 26, 16・13

キリストのみ国 ………ルカ1・33

神の家 ……………………チモテオ前書3・15

キリストの羊の群 ……ヨハネ10・16

キリストを頭とする体 コリント前書12・12〜30, エフェゾ書4・4, 15, 16, 5・23, コロサイ書1・18

キリストとの一致 ……エフェゾ書5・31, 32

妻のたとえ ……………エフェゾ書5・25〜27, 31, 32

主要な引証

神

存在の証明……………使徒行録14・15, 16, 17・24〜29, ロマ書1・18〜23
神の愛……………………ヨハネ3・16, 15・9, 16・27, ロマ書5・8〜11, 8・28〜34, エフェソ書5・2, ヨハネI書3・16, 4・6, 8〜11, 19
神の摂理への信頼……マテオ6・8, 25〜34, ルカ12・6, 7, ヘブレオ書13・5, 6, ヤコボ書4・13〜15, ペトロ前書5・7
神の審判………………マテオ10・15, 11・22〜24, 12・36, 41, 42, 16・27, 25・31〜46, マルコ8・38, ルカ9・26, 10・14, 11・31, 32, ロマ書2・5〜8, チモテオ後書4・8, ヤコボ書2・12, 13, ペトロ前書1・17〜19
神の子どもの心得……ロマ書8・14〜17, 28〜34, ガラチア書4・5〜7, ヨハネI書3・1〜11
神に光栄を帰すこと…ヨハネ15・8, ロマ書14・7, 8, コリント前書10・31, コロサイ書3・17, テサロニケ前書2・4, チモテオ前書1・17
三位一体の神…………マテオ11・27, 28・19, コリント後書13・13

キリスト

神の御子………………マテオ16・16, 26・63, 64, マルコ14・61, 62, ルカ22・69, 70, ヨハネ1・18, 3・16〜18, 5・17, 23, 43, 45, 6・46, 8・42, 54, 9・35〜37, 11・27, 16・28, ロマ書8・32, ヨハネI書4・14, 15, 5・5, 9〜12, 20
御父との一致…………ヨハネ5・18, 19, 23, 30, 10・30, 14・1〜13, 16・15, 17・10
神………………………マテオ28・19, 20, ロマ書9・5, フィリッピ書2・6, コロサイ書1・15〜20, 2・9, チト書2・13, ヘブレオ書1・8, ペトロ後書1・3, ヨハネI書3・16, 5・20
創造主…………………ヨハネ1・3, コロサイ書1・16, ヘブレオ書1・2, 10, 3・3, 14
立法者…………………マテオ5・22, 28, 31, 32, 34, 37, 39, 44, 19・9, マルコ2・27, 28
光栄の主………………コリント前書2・8
王の王, 主の主………黙示録17・14, 19・16
原因および終極………黙示録1・7, 8, 17, 18, 2・8, 22・12, 13
第二のアダム…………ロマ書5・12〜21, コリント前書15・22, 45〜47
キリストの卑下………マテオ20・28, マルコ10・45, ルカ22・37, コリント後書8・9, フィリッピ書2・7, 8, ヘブレオ書4・15, 5・7〜9
すべての人のために死

		マテオ	マルコ	ル　カ	ヨハネ
327	将来の苦難を告げらる…	—	—	—	21・18～24
328	イエズス，山上の出現…	28・16～17	—	—	—
329	種々の教訓………………	28・18～20	16・15～18	24・44～48	—
330	聖霊を賜う約束…………	—	—	24・49	—
331	イエズスご昇天…………	—	16・19	24・50～51	—
332	弟子たち，エルザレムに帰る………………………	—	—	24・52～53	—
333	布教のために出発す……	—	16・20	—	—
334	福音に書きのせざること多し………………………	—	—	—	20・30～21・25

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
	七)……………………	——	——	23・46	——
304	息絶え給う………………	27・50	15・37	23・46	19・30
305	神殿の幕裂く……………	27・51	15・38	23・45	——
306	地震および死者の復活…	27・51～53	——	——	——
307	百夫長および群衆の所感	27・54	15・39	23・47～48	——
308	イエズスの忠友…………	27・55～56	15・40～41	23・49	——
309	槍にて突かれ給う………	——	——	——	19・31～37
310	十字架より下ろされ葬られ給う……………………	27・57～61	15・42～47	23・50～56	19・38～42
311	**土曜日** 墓の封印および番兵…………………	27・62～66	——	——	——
312	婦人また香料を買う……	——	16・1	——	——

16 ご復活およびご昇天

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
313	婦人たち墓を訪う………	28・1	16・2～3	24・1	20・1
314	地震。天使の出現。墓はから。……………………	28・2～4	16・4	24・2～3	——
315	ペトロとヨハネと墓に至る…………………………	——	——	24・12	20・2～10
316	天使，婦人たちおよびマグダレナにご復活を告ぐ	28・5～7	16・5～7	24・4～8	——
317	婦人たち弟子たちのもとに行く……………………	28・8	16・8	——	20・11～17
318	イエズス，マグダレナ・マリアに現われ給う……	——	16・9～11	——	——
319	途中，婦人たちにも現われ給う…………………	28・9～10	——	——	——
320	婦人たち，これを弟子たちに告ぐ…………………	——	——	24・9～11	20・18
321	番兵，わいろを受く……	28・11～15			
322	エンマウスの道にて二人の弟子に現われ給う……	——	16・12～13	24・13～35	——
323	トマの不在中，使徒たちに現われ給う……………	——	16・14	24・36～43	20・19～23
324	トマもおる時，また現われ給う…………………	——	——	——	20・24～31
325	海辺に現われ給う………	——	——	——	21・1～14
326	ペトロ総牧者に立てらる	——	——	——	21・15～17

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
277	ちょうちゃく，いばらの冠……………………	—	—	—	19・1〜3
278	見よ人を…………………	—	—	—	19・4〜7
279	ピラトの煩悶…………	—	—	—	19・8〜14
280	ユデア人，イエズスの死刑をこう…………………	27・23	15・14	23・23	19・15
281	ピラト手を洗う…………	27・24〜25	—	—	—
282	ピラトの宣告…………	27・26	15・15	23・24〜25	19・16
283	イエズス，嘲弄され給う	27・27〜30	15・16〜19	—	—
284	刑場に引かれ給う………	27・31	15・20	—	19・16〜17
285	シレネのシモン…………	27・32	15・21	23・26	—
286	泣ける婦人に答え給う…	—	—	23・27—31	—
287	二人の強盗…………………	—	—	23・32	—
288	刑場に着き給う…………	27・33〜34	15・22〜23	23・33	—
289	十字架につけられ給う…	—	—	23・33	19・18
290	父よ許し給え（七言の第一）……………………	—	—	23・34	—
291	罪標（すてふだ）………	27・37	15・26	23・38	19・19〜22
292	衣服分かたる……………	27・35	15・24	23・34	19・23〜24
293	時刻，番兵など…………	27・36	15・25〜26	—	—
294	強盗もはりつけにせらる	27・38	15・27〜28	—	—
295	傍観者の嘲弄……………	27・39〜43	15・29〜32	23・35	—
〃	兵卒らの嘲弄……………	—	—	23・36〜37	—
〃	強盗の嘲弄………………	27・44	15・32	—	—
296	一人の強盗の改心（七言の第二）…………………	—	—	23・39〜43	—
297	聖母と愛弟子への言葉（七言の第三）…………	—	—	—	19・25〜27
298	日中の闇…………………	27・45	15・33	23・44〜45	—
299	午後三時の言葉（七言の第四）……………………	27・46〜47	15・34〜35	—	—
300	のど，かわけり（七言の第五）……………………	—	—	—	19・28
301	酢を浸したる海綿………	27・48〜49	15・36	—	19・29
302	成り終われり（七言の第六）……………………	—	—	—	19・30
303	大いなる叫び。魂をみ手に託し奉る。（七言の第				

		マテオ	マルコ	ル カ	ヨハネ
257	マルクスの耳切り落とさる……	26・51〜54	14・47	22・49〜51	18・10〜11
258	イエズスのご受縛，弟子たちの逃走……	26・55〜56	14・48〜52	22・52〜53	18・12
259	**金曜日** イエズス，カイファのもとに引かれ給う……	26・57	14・53	22・54	——
260	アンナの家に引かれ給う	——	——	——	18・13〜14
261	ペトロ第一の否み……	26・58	14・54	22・55〜57	18・15〜18
262	イエズス第一の尋問。ほおを打たれ給う……	——	——	——	18・19〜23
263	カイファのもとに至り給う……	——	——	——	18・24
264	衆議所へのご出廷……	26・59〜68	14・55〜65	——	——
(265)	ペトロ第一の否みの再録	26・69〜70	14・66〜68	——	——
〃	第二，第三の否み……	26・71〜75	14・69〜72	22・58〜62	18・25〜27
266	夜中，イエズスあざけられ給う……	——	——	22・63〜65	——
267	夜明けに衆議所の議員集まる……	27・1	15・1	22・66	——
〃	尋問およびご答弁……	——	——	22・66〜71	——
268	イエズス，ピラトのもとに送られ給う……	27・2	15	23・1	——
269	ユダの失望……	27・3〜10	——	——	——
270	イエズス，ピラトの前に出廷し給う。無罪の言いわたし……	27・11〜14	15・2〜5	23・2〜4	18・28〜38
271	イエズス，ヘロデのもとに送られ給う……	——	——	23・5〜12	——
272	またピラトの前に出廷し給う……	——	——	23・13〜16	——
273	イエズスとバラバといずれを許すべきか……	27・15〜18	15・6〜10	23・17	18・39
274	ピラトの妻の伝言……	27・19	——	——	——
275	司祭長らの煽動……	27・20	15・11	——	——
〃	バラバ先にせらる……	27・21	——	23・18〜19	18・40
276	ピラト，イエズスを許さんとす……	27・22〜23	15・12〜14	23・20〜22	——

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
229	寡婦のさいせん…………	——	12・41～44	21・1～4	——
230	エルザレム滅亡などの予言…………………………	24・1～35	13・1～31	21・5～33	——
231	警戒すべし…………	24・36～42	13・34～36	——	——
232	家父らの例…………	24・43～51	——	——	——
233	10人の乙女のたとえ……	25・1～13	——	——	——
234	タレントのたとえ………	25・14～30	——	——	——
235	審判のありさま…………	25・31～46	——	——	——
236	昼は神殿に，夜はかんらん山に居給う……………	——	——	21・37～38	——
237	ご受難の最後の予言……	26・1～2	——	——	——
238	司祭長らの謀計…………	26・3～5	14・1～2	22・1～2	——
(239) 202	香油を注がれ給う………	26・6～13	14・3～9	——	(12・1～8)
240	ユダとユデア人との契約	26・14～16	14・10～11	22・3～6	——

14　最終の過ぎ越しの晩さん

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
241	**木曜日**　晩さんの準備	26・17～19	14・12～16	22・7～13	——
242	最終の晩さん……………	26・20	14・17	22・14～18	——
243	弟子の足を洗い給う……	——	——	——	13・1～17
244	謀叛人ここにおることを示し給う…………………	26・21～25	14・18～21	——	13・18～25
245	聖体の秘跡の制定………	26・26～29	14・22～25	22・19～20	——
246	謀叛人示さる……………	——	——	22・21～23	13・26～30
247	使徒たちの争論…………	——	——	22・24～30	——
248	ペトロのつまずきの予言	——	——	22・31～34	——
249	弟子たち警戒せらる……	——	——	22・35～38	——
250	食堂における談話………	——	——	——	13・31～14
251	ゲッセマニに行く途中の談話…………………………	——	——	——	15，16
252	イエズスの司祭的祈禱…	——	——	——	17
253	かんらん山に出ず………	26・30	14・26	22・39	18・1
254	弟子たちおよびペトロのつまずき予言せらる……	26・31～35	14・27～31	——	——

15　イエズスのご受難

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
255	ゲッセマニにおけるご心痛…………………………	26・36～46	14・32～42	22・40～46	——
256	敵らイエズスを捕えに来る…………………………	26・47～50	14・43～45	22・47～48	18・2～9

13 エルザレムにおける最後の週間（紀元30年4月）

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
204	**日曜日** エルザレムにおけるイエズスの歓迎…	21・1～9	11・1～10	19・28～38	12・12～18
205	ファリザイ人の憤満……	21・15～16	——	19・39～40	12・19
206	イエズス，エルザレムのために泣き給う…………	——	——	19・41～44	——
207	市中および聖殿に入り給う…………………………	21・10～13	11・11	——	——
208	多くの病人いやさる……	21・14	——	——	——
209	ベタニアに帰り給う……	21・17	11・11	——	——
210	**月曜日** いちじくの木呪わる……………………	21・18～19	11・12～14	——	——
211	商人また神殿より追い出ださる……………………	21・12～13	11・15～18	19・45～46	——
212	異教人，イエズスにまみえんことをこう…………	——	——	——	12・20～36
213	またベタニアに帰り給う	——	11・19	——	——
214	**火曜日** 呪われしいちじく枯れり………………	21・20～22	11・20～24	——	——
215	祈るため人に許すべし…	——	11・25～26	——	——
216	日々神殿にて教え給う…	——	——	19・47～48	——
217	イエズスの権威の原因…	21・23～27	11・27～33	20・1～8	——
218	二人の息子の従順の差異	21・28～32	——	——	——
219	ぶどう畑の小作人のたとえ。司祭長らの憤満……	21・33～46	12・1～12	20・9～19	——
220	王子の婚宴のたとえ……	22・1～14	——	——	——
221	セザルのものはセザルに返せ…………………………	22・15～22	12・13～17	20・20～26	——
222	復活に関する問答………	22・23～33	12・18～27	20・27～40	——
223	最大の掟…………………	22・34～40	12・28～34	——	——
224	**水曜日** キリスト，ダヴィドの子たること……	22・41～46	12・35～37	20・41～44	——
225	ユデア人の不信および卑怯…………………………	——	——	——	12・37～43
226	人民に対する最終の勧告	——	——	——	12・44～50
227	ファリザイ人を咎め給う	23・1～36	12・38～40	20・45～47	——
228	エルザレムよ!…………	23・37～39	——	——	——

		マテオ	マルコ	ル　カ	ヨハネ
178	幾たび許すべきか………	18・21～22	——	——	——
〃	負債ある臣下のたとえ…	18・23～35	——	——	——
179	信仰および従順につきて	——	——	17・ 5～10	
180	サマリアで10人のらい病者いやさる………………	——	——	17・11～19	——
181	キリストご来臨の問題…	——	——	17・20～37	——
182	判事と寡婦とのたとえ…	——	——	18・ 1～ 8	——
183	ファリザイ人と収税吏とのたとえ…………………	——	——	18・ 9～14	——

12　ヨルダン川を渡りてユデアに旅行し給う

		マテオ	マルコ	ル　カ	ヨハネ
184	ヨルダン川のかなたにおける教訓および治癒……	19・ 1～ 2	10・ 1	——	10・40—42
185	離婚のことを論じ給う…	19・ 3～ 9	10・ 2～12	——	——
186	独身につきて……………	19・10～12	——	——	——
187	ラザルの復活……………	——	——	——	11・ 1～44
188	その結果…………………	——	——	——	11・45～52
189	イエズス，エフレムに退き給う……………………	——	——	——	11・53～54
190	過ぎ越しの祭，近づく…	——	——	——	11・55～56
191	幼子らを祝し給う………	19・13～15	10・13～16	18・15～17	——
192	富める青年………………	19・16～22	10・17～22	18・18～23	——
193	富の危険…………………	19・23～26	10・23～27	18・24～27	——
194	イエズスに従う人の報酬	19・27～30	10・28～31	18・28～30	——
195	ぶどう畑の小作人のたとえ…………………………	20・ 1～16	——	——	——
196	またご受難を予言し給う	20・17～19	10・32～34	18・31～34	——
197	ゼベデオの子らの願い…	20・20～28	10・35～45	——	——
198	エリコで一人のめしいいやさる……………………	——	——	18・35～43	——
199	収税吏の頭ザケオ………	——	——	19・ 1～10	——
200	金十斤のたとえ…………	——	——	19・11～28	——
201	エリコ出立の時，二人のめしいいやさる…………	20・29～34	10・46～52	——	——
202	ベタニアにて香油を注がれ給う……………………	26・ 6～13	14・ 3～ 9	——	12・ 1～ 8
203	ラザルに対する謀計……	——	——	——	12・ 9～11

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
152	母幸いなりといわる……	——	——	11・27〜28	——
153	現代の人，ファリザイ人らを咎め給う……………	——	——	11・29〜54	——
154	偽善および勇気につきて	——	——	12・1〜12	——
155	貪欲につきて，富豪のたとえ……………………	——	——	12・13〜21	——
156	世の思いわずらいを避くべし……………………	——	——	12・22〜34	——
157	警戒すべし………………	——	——	12・35〜48	——
158	教えの結果………………	——	——	12・49〜53	——
159	季節の印…………………	——	——	12・54〜59	——
160	殺されしガリレア人の例	——	——	13・1〜5	——
161	実らざるいちじくのたとえ…………………………	——	——	13・6〜9	——
162	腰のまがりたる女いやさる…………………………	——	——	13・10〜17	——
163	また，からし種およびパン種のたとえ…………	——	——	13・18〜21	——
164	狭き門より入るべし……	——	——	13・22〜30	——
165	ヘロデに答うべきこと…	——	——	13・31〜33	——
〃	エルザレムは禍いなり…	——	——	13・34〜35	——
166	水腫の人いやさる………	——	——	14・1〜6	——
〃	上席を求むべからず……	——	——	14・7〜11	——
〃	純粋の慈善………………	——	——	14・12〜15	——
167	宴会に招かれたる人のたとえ…………………………	——	——	14・16〜24	——
168	弟子となる心得…………	——	——	14・25〜35	——
169	失せたる羊および銀貨のたとえ……………………	——	——	15・11〜10	——
170	放蕩息子のたとえ………	——	——	15・11〜32	——
171	不正なる家令のたとえ…	——	——	16・1〜13	——
172	ファリザイ人らの侮辱に対して……………………	——	——	16・14〜18	——
173	無慈悲なる富豪のたとえ	——	——	16・19〜31	——
174	つまずきに関する談話…	18・6〜11	9・41〜49	17・1〜2	——
175	魂の価値…………………	18・12〜14	——	——	——
176	相互いの説諭……………	18・15	——	17・3〜4	——
177	教会の裁判………………	18・16〜20	——	——	——

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
	し給う……	—	9・29	—	7・10〜13
131	神殿における説教……	—	—	—	7・14〜36
132	祭の八日目……	—	—	—	7・37〜53
〃	かんらん山に一宿し給う	—	—	—	8・1
133	その翌日。姦婦の事件…	—	—	—	8・2〜11
134	談話のつづき……	—	—	—	8・12〜59
135	生まれながらのめしいいやさる……	—	—	—	9・1〜41
136	良き牧者の話……	—	—	—	10・1〜21

10 奉殿記念祭およびガリレアにおける最後のご滞在 （紀元29年12月）

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
137	奉殿記念祭。イエズスと御父と一にましますこと	—	—	—	10・22〜39
138	ガリレアにおいて，またご受難を予言し給う……	17・21〜22	9・30〜31	9・44〜45	—
139	カファルナウムにおける納税……	17・23〜26	—	—	—
140	首席に関する争論……	18・1〜5	9・32〜36	9・46〜48	—
141	寛容の必要……	—	9・37〜40	9・49〜50	—

11 最終の過ぎ越し祭のご旅行とガリレアご巡回

（紀元29年10月から30年4月まで）

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
142	サマリア人，この旅行を忌む……	—	—	9・51〜56	—
143	弟子となるべき資格……	—	—	9・57〜62	—
144	70人の弟子の派遣およびその心得……	—	—	10・1〜12	—
145	(74)海辺の町に永訣を告げ給う……	—	—	10・13〜16	—
146	弟子たち布教より帰る…	—	—	10・17〜20	—
147	イエズスの感謝……	—	—	10・21〜24	—
148	慈善なるサマリア人のたとえ……	—	—	10・25〜37	—
149	マルタおよびマリアの家において……	—	—	10・38〜42	—
150	祈り方を教え給う……	—	—	11・1〜4	—
〃	ねだる人のたとえ……	—	—	11・5〜13	—
151	(70) ファリザイ人らの冒瀆…	—	—	11・14〜26	—

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
	8 第三の過ぎ越し祭より幕屋祭まで（紀元29年4月より10月まで）				
111	過ぎ越しの祭より帰り給う……………………………	—	—	—	7・1
112	古人の伝えについて……	15・1〜9	7・1〜13	—	—
113	人を汚すものは何ぞ……	15・10〜20	7・14〜23	—	—
114	チロおよびシドン地方…	15・21	7・24	—	—
〃	カナアンの婦人の娘いやさる………………………	15・22〜28	7・25〜30	—	—
115	デカポリにておしつんぼいやさる…………………	—	7・31〜37	—	—
116	他の人々いやさる………	15・29〜31	—	—	—
117	七つのパンをふやし給う	15・32〜38	8・1〜9	—	—
118	マゲダンおよびダルマヌタにおいて………………	15・39	8・10	—	—
119	ファリザイ人，印を見んことを望む………………	16・1〜4	8・11〜13	—	—
120	ファリザイ人のパン種…	16・5〜12	8・14〜21	—	—
121	ベッサイダで一人のめしいいやさる………………	—	8・22〜26	—	—
122	カイザリア地方における人の子に関する問答……	16・13〜15	8・27〜28	9・18〜19	—
123	ペトロの信仰の宣言およびその報い………………	16・16〜19	8・29	9・20	—
〃	それに対する戒め………	16・20	8・30	9・21	—
124	ガリレアにおいて初めてご受難を予言し給う……	16・21	8・31	9・22	—
〃	ペトロ譴責せらる………	16・22〜23	8・32〜33	—	—
125	イエズスのあとにつく条件……………………………	16・24〜28	8・34〜39	9・23〜27	—
126	イエズスのご変容………	17・1〜8	9・1〜7	9・28〜36	—
127	エリアに関する答………	17・9〜13	9・8〜12	—	—
128	てんかんの悪魔つきいやさる…………………………	17・14〜17	9・13〜26	9・37〜43	—
129	祈祷と断食との効能……	17・18〜20	9・27〜28	—	—
	9 幕屋祭より奉殿記念祭まで（紀元29年10月より12月まで）				
130	幕屋祭近づく……………	—	—	—	7・2〜9
〃	イエズス，ひそかに出発				

			マテオ	マルコ	ル　カ	ヨハネ
88		宝，真珠，網引きのたとえ…………………………	13・44〜52	——	——	——
89	52	海上の嵐を静め給う……	——	4・35〜40	8・22〜25	——
90		ゲラサの悪魔つきいやさる…………………………	(8・28〜34)	5・1〜20	8・26〜39	——
91	58	カファルナウムにおけるヤイロの願い……………	9・18	5・21〜24	8・40〜42	——
92	58	血漏の女いやさる………	(9・19〜22)	5・25〜34	8・43〜48	——
93	58	ヤイロの娘の復活………	(9・23〜26)	5・35〜43	8・49〜56	——
94	58	二人のめしいおよびおしいやさる……………………	(9・27〜34)	——	——	——
95		ナザレトにおいて軽べつされ給う…………………	13・54〜58	6・1〜6	——	——
96		使徒の派遣と布教上の当分の方針…………………	10・5〜15	6・7〜12	9・1〜5	——
97		将来の方針………………	10・16〜42	——	——	——
98		使徒たちも布教す………	11・1	6・12〜13	9・6	——
99		ヘロデ，イエズスの名声に驚く……………………	14・1〜2	6・14〜16	9・7〜9	——
100		洗者ヨハネの入獄および斬首…………………………	14・3〜12	6・17〜29	——	——
101		使徒たち布教より帰る…	——	6・30〜31	9・10	——
102		ベッサイダの荒野に退き給う…………………………	14・13〜14	6・32〜34	9・11	6・1〜4
103		五つのパンをふやし給う	14・15〜21	6・35〜44	9・12〜17	6・5〜13
104		イエズス，感動せる群衆を避け給う………………	14・22〜23	6・45〜46	——	6・14〜15
105		水上を歩み給う…………	14・24〜33	6・47〜52	——	6・16〜21
106		群衆，カファルナウムに出で迎う…………………	——	——	——	6・22〜24
107		天よりのパンに関する談話…………………………	——	——	——	6・25〜59
108		数人の弟子離る…………	——	——	——	6・60〜67
109		ペトロの忠言……………	——	——	——	6・68〜72
110		ゲネザレト地方の巡回…	14・34〜36	6・53〜56	——	——

			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
62		安息日に弟子たち麦穂をつむ…………………………	12・ 1～ 8	2・23～28	6・ 1～ 5	—
63		安息日に手なえたる人いやさる……………………	12・ 9～13	3・ 1～ 6	6・ 6～11	—
64		イエズス，ファリザイ人を避け給う………………	12・14～21	3・ 7～12	—	—
65		山における12使徒の選定	10・ 1～ 4	3・13～19	6・12～16	—
66	52	おびただしき人々いやさる…………………………	—	—	6・17～19	—
67		種々の教訓………………	—	—	6・20～49	—
68		カファルナウムにおいて一人のしもべいやさる…	8・ 5～13	—	7・ 1～10	—
69		ナイムにおいて寡婦の子復活す……………………	—	—	7・11～18	—
70		カファルナウムに帰り給う…………………………	—	3・20～21	—	—
71		悪魔つきのいやさるるは悪魔によれりと言わる…	12・22～37	3・22～30	—	—
72		人々，印をこう…………	12・38～45	—	—	—
73		イエズスの母および親族	12・46～50	3・31～35	—	—
74		洗者ヨハネの使…………	(11・ 2～19)	—	7・18～35	—
75		不信者は禍いなり，小さきものは幸いなり………	(11・20～30)	—	—	—
76		罪女の改心………………		—	7・36～50	—

7 秋より第三の過ぎ越しの祭までの事実

			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
77		ガリレア布教……………	—	—	8・ 1～ 3	—
78		海辺の説教………………	13・ 1～ 3	4・ 1～ 2	8・4	—
79		種まきのたとえ，およびその解釈…………………	13・ 4～23	4・ 3～20	8・ 5～15	—
80		かくれざるべし…………	—	4・21～25	8・16～18	—
81	(37)	イエズスの親族はたれ…	—	—	8・19～21	—
82		自然に生ゆる種のたとえ	—	4・26～29	—	—
83		毒麦のたとえ……………	13・24～30	—	—	—
84		からし種のたとえ………	13・31～32	4・30～32	—	—
85		パン種のたとえ…………	13・33	—	—	—
86		たとえの理由……………	13・34～35	4・33～34	—	—
87		毒麦のたとえの解釈……	13・36～43	—	—	—

			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
		いて冷遇され，カファルナウムに帰り給う………	——	——	4・16〜32	——
42	(47)	四人の漁師……………………	4・18〜22	1・16〜20	5・10〜11	——
43		カファルナウムで悪魔つきいやさる………………	——	1・21〜28	4・33〜37	——
44		ペトロの姑と多くの病人いやさる……………………	8・14〜17	1・29・34	4・38〜41	——
45		その地方に布教し給う…	——	1・35〜39	4・42〜44	——
46		ペトロの舟における説教	——	——	5・1〜3	——
47	(42)	奇跡的漁業…………………	——	——	5・4〜11	——
48		ガリレアの巡教…………	4・23〜25	——	——	——
49		山上の説教………………	5・6・7	——	——	——
50		らい病者いやさる………	8・1〜4	1・40〜45	5・12〜16	——
(51)	67	百夫長の子らいやさる…	(8・5〜13)	——	——	——
52	89	湖を渡る時，嵐が静められる……………………	8・18〜27	——	——	——
(53)	90	グラサの悪魔つきいやさる…………………………	(8・28〜34)	——	——	——
54		カファルナウムに帰り給う。中風者いやさる……	9・1〜	2・1〜12	5・17〜26	——
55		マテオ召さる……………	9・9	2・13〜14	5・27〜28	——
56		宴会の時，ファリザイ人つぶやく…………………	9・10〜13	2・15〜17	5・29〜35	——
57		ヨハネの弟子たちもつぶやく………………………	9・14〜17	2・18〜22	5・36〜39	——
(58)91	93	ヤイロの願い。血漏の女いやさる。ヤイロの娘よみがえる。二人のめしいと一人の悪魔つきいやさる…………………………	9・18〜34	——	——	——
59		過ぎ越し祭の前の巡教…	9・35〜38	——	——	——
(60)	65	12使徒の選定および派遣	10	——	——	——
〃	74	ヨハネの使たち…………	11	——	——	——

6　第二の過ぎ越しの祭より秋までの事実

		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
60	池のほとりの病人いやさる…………………………	——	——	——	5・1〜18
61	神殿における説教………	——	——	——	5・19〜47

			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
19		各階級に対する教訓……	3・7〜10	—	3・7〜14	—
20		キリストを証明す………	3・11〜12	1・6〜8	3・15〜18	—
(21)	35	洗者ヨハネ入獄の予録…	—	—	3・19〜20	—
22		イエズス洗せられ給う…	3・13〜17	1・9〜11	3・21〜22	—
(23)	7	ルカの伝えし系図………	—	—	3・23〜38	—
24		荒野における断食および試み……………………	4・1〜11	1・12〜13	4・1〜13	—
25		衆議所の使に対するヨハネの証明…………………	—	—	—	1・19〜28
26		おのが弟子に対するヨハネの証明…………………	—	—	—	1・29〜34
27		イエズスの最初の弟子…	—	—	—	1・35〜42
28		イエズス，ガリレアに帰り給う………………………	—	—	—	1・43〜51
29		カナの婚宴における第一回の奇跡…………………	—	—	—	2・1〜11
30	(39)	カファルナウムに滞在し給う………………………	—	—	—	2・12

4 ユデアにおける布教（第一の過ぎ越し祭より洗者ヨハネの入獄まで）

			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
31		商人を神殿より追い出だし給う………………………	—	—	—	2・13〜22
32		最初の信者………………	—	—	—	2・23〜25
33		ニコデモとの談話………	—	—	—	3・1〜21
34		ユデアに滞在し給う。ヨハネの最終の証明………	—	—	—	3・32〜36
35		洗者ヨハネの入獄………	4・12	1・14	3・19〜20	—
36		イエズス，サマリアをよぎり給う。サマリア婦人との談話…………………	—	—	—	4・1〜42
37		ガリレアに帰り給う……	4・12	1・14	—	4・43〜45
38		カナにおいて王官の子いやさる…………………	—	—	—	4・46〜54
39	(30)	カファルナウムに寄留し給う………………………	4・13〜16	—	—	—

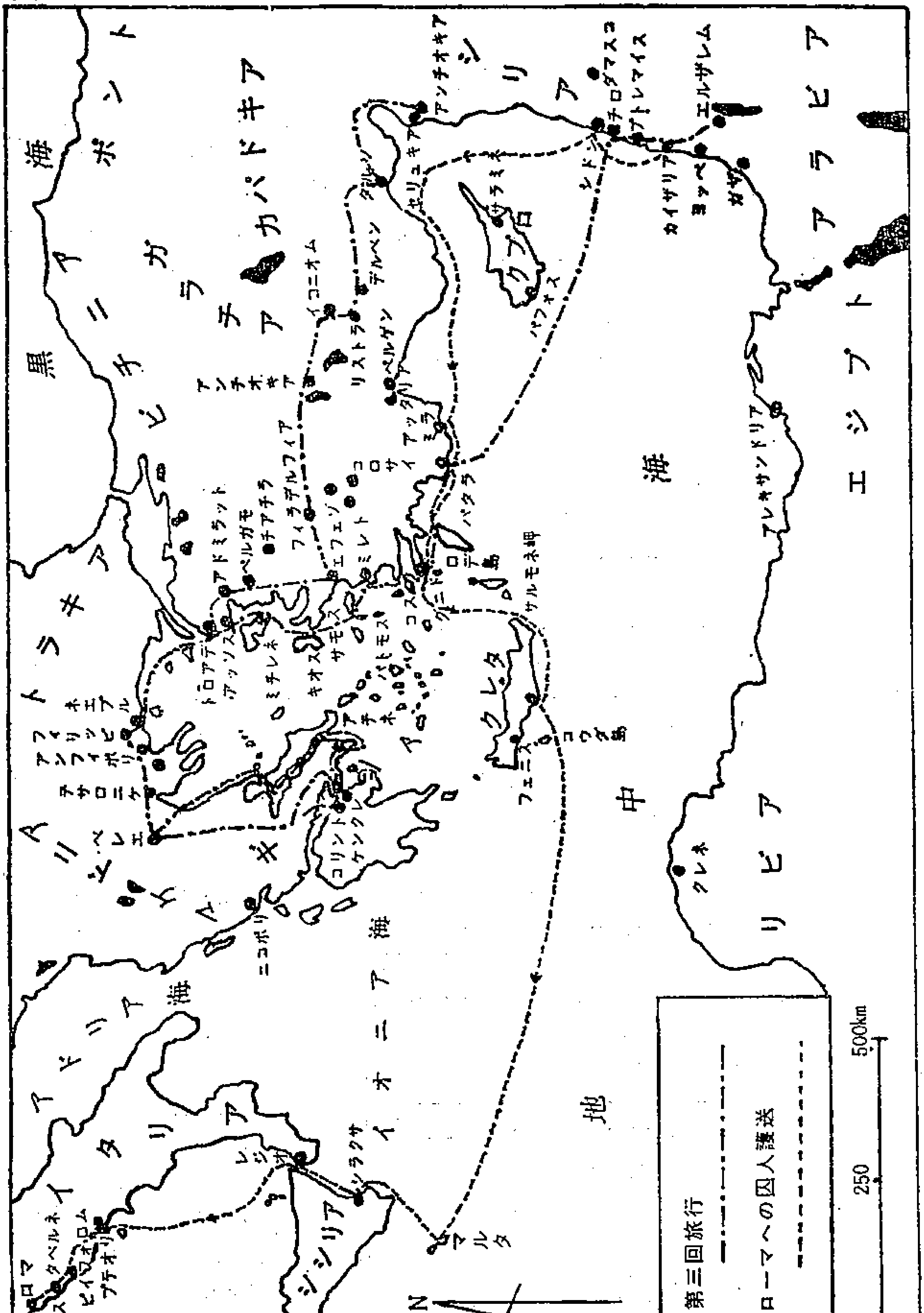
5 ガリレアにおける布教（ヨハネの入獄より第二の過ぎ越し祭まで）

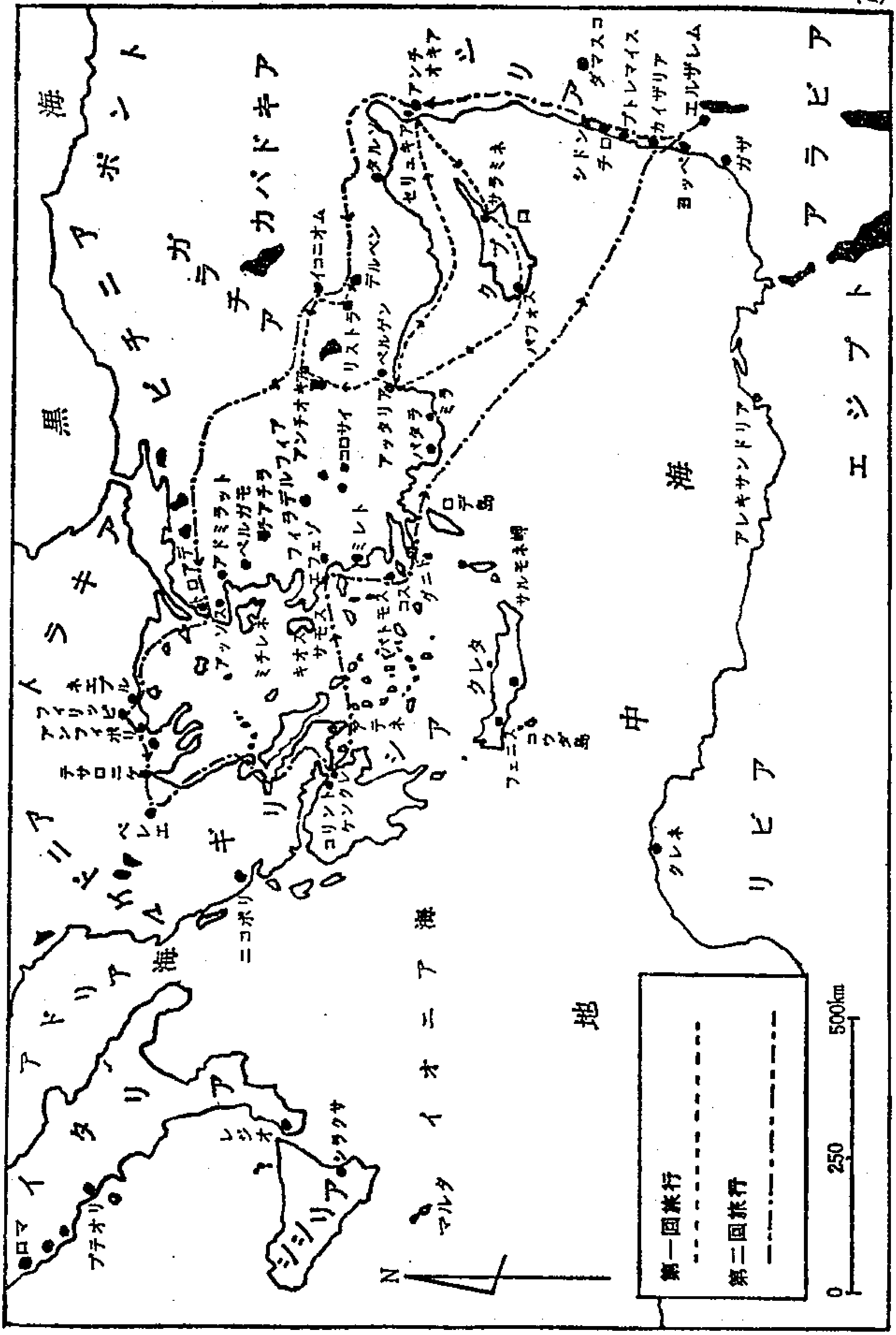
			マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
40		ガリレア布教の初め……	4・17	1・14〜15	4・14—15	—
41		イエズス，ナザレトにお				

四福音書和合表

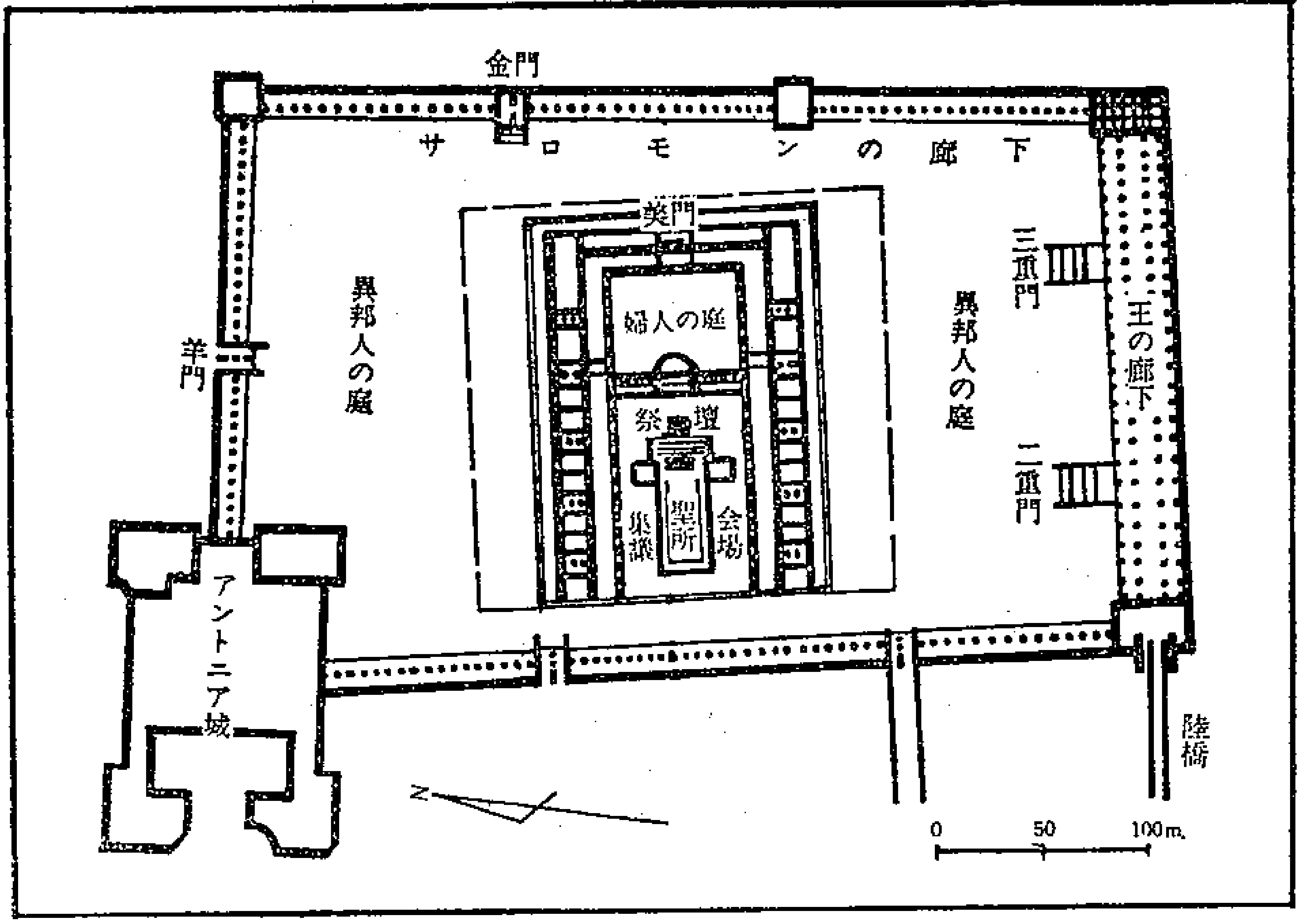
（　）をほどこしている番号は，歴史的事実の疑わしいもので，その上または下に記した番号が正確である。

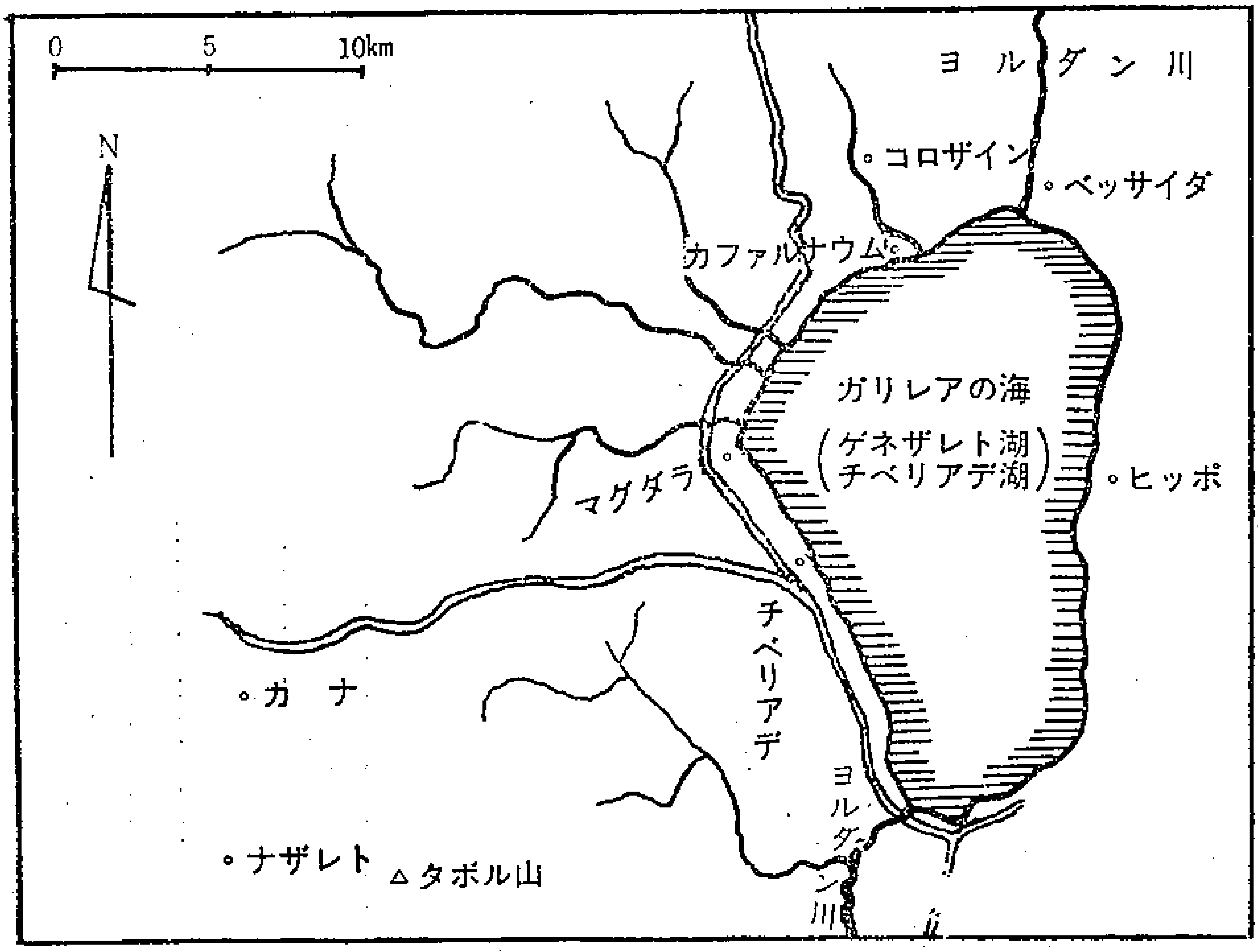
		マテオ	マルコ	ルカ	ヨハネ
	緒　言				
1	テオフィロに対するルカの緒言	—	—	1・1〜4	—
2	託身のみ言葉	—	—	—	1・1〜15
	1　イエズスご降誕前の事実				
3	先駆者ヨハネ誕生の予告	—	—	1・5〜25	—
4	聖母マリア，天使の告げをこうむる	—	—	1・26〜38	—
5	マリア，エリザベトを訪問す	—	—	1・39〜56	—
6	先駆者ヨハネの誕生	—	—	1・57〜80	—
7	(23)キリストの系図	1・1〜17	—	—	—
8	ヨゼフとマリアとの婚姻	1・18〜25	—	—	—
	2　イエズスのご降誕および私生活（約紀元前6年より紀元後26年まで）				
9	イエズスのご降誕	—	—	2・1〜20	—
10	割礼および命名式	—	—	2・21	—
11	神殿に献げられ給う	—	—	2・22〜39	—
12	博士たちの参拝	2・1〜12	—	—	—
13	エジプトへのご避難	2・13〜18	—	—	—
14	エジプトよりのご帰国	2・19〜23	—	—	—
〃	イエズスのご幼年	—	—	2・40	—
15	神殿における12才のイエズス	—	—	2・41〜50	—
16	30才までのご生活	—	—	2・51〜52	—
17	恩寵と真理とはイエズスによる	—	—	—	1・16〜18
	3　公生活の発端（洗者ヨハネの宣教より，イエズス過ぎ越しの祭のためエルザレムへ旅行し給うまで。紀元26年の秋から27年の春まで。）				
18	先駆者の宣教	3・1〜6	1・1〜5	3・1〜6	—


黒海
ポント
ビテニア
ガラテア
カパドキア
シリア
アラビア
エジプト
リビア
地中海
イオニア海
アドリア海
イタリア
シシリア
マケドニア
トラキア
アカヤ
クレタ
キプロス
ロマ
トレスタベルネ
アッピイフォロム
プテオリ
シラクサ
マルタ
ニコポリ
コリント
ケンクレア
アテネ
テサロニケ
ベレア
アンフィポリ
フィリッピ
ネアポリ
トロアス
ミテレネ
キオス
サモス
パトモス
エフェソ
ミレト
コス
ロドス
クニド
パタラ
サルモネ岬
フェニクス
クレネ
アレキサンドリア
カイザリア
ヨッペ
ガザ
エルサレム
プトレマイス
ツロ
ダマスコ
シドン
サラミス
パフォス
アンチオキア
タルソ
イコニオム
リストラ
デルベ
ペルゲ
アタリア
ベルガモ
チアテラ
フィラデルフィア
コロサイ
第三回旅行
ローマへの囚人護送
N
0
250
500km

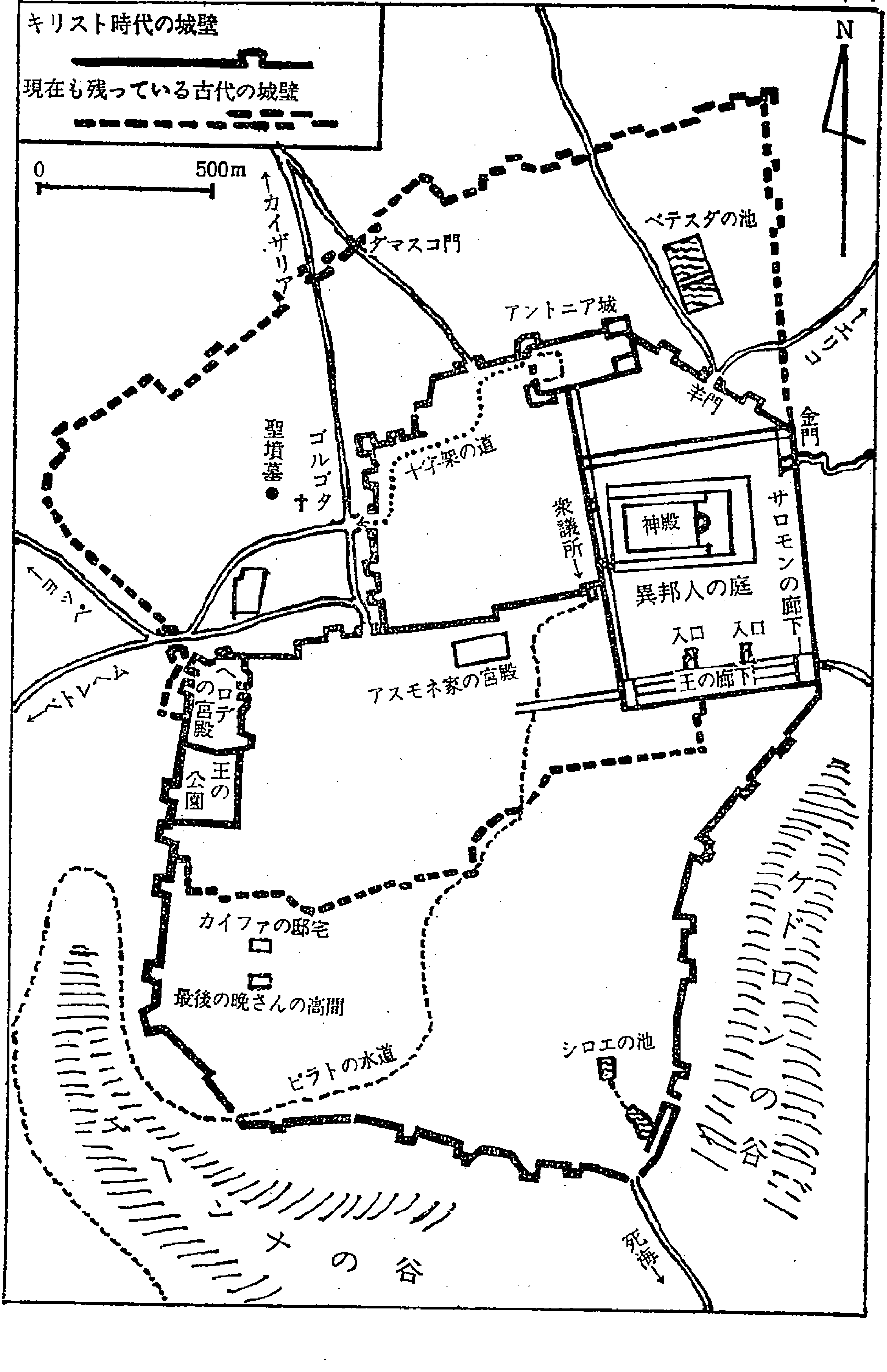

黒海
ポントス
カパドキア
ガラテア
ピシデア
アジア
ミシア
マケドニア
ギリシア
アドリア海
イタリア
シシリア
イオニア海
地中海
クレタ
リビア
エジプト
アラビア
シリア
キプロ
アンテオキア
ダマスコ
エルサレム
カイザリア
ヨッペ
ガザ
シドン
ツロ
プトレマイス
セリュキア
タルソ
サラミネ
パフォス
ペルゲ
アッタリア
イコニオム
リストラ
デルベ
ピシデアのアンテオキア
コロサイ
ラオデキア
ヒエラポリス
エペソ
ミレト
ロデ島
パタラ
ミラ
クニド
コス
パトモス
サモス
キオス
ミテレネ
アソス
トロアデ
ネアポリス
ピリピ
アンピポリス
アポロニヤ
テサロニケ
ベレヤ
アテネ
コリント
ケンクレヤ
ニコポリ
アレキサンドリア
クレネ
サルモネ岬
フェニクス
カウダ島
マルタ
シラクサ
レギオ
プテオリ
ローマ
第一回旅行
第二回旅行
0　250　500km
N

(3)　ヘロデの神殿とガリレア海付近図

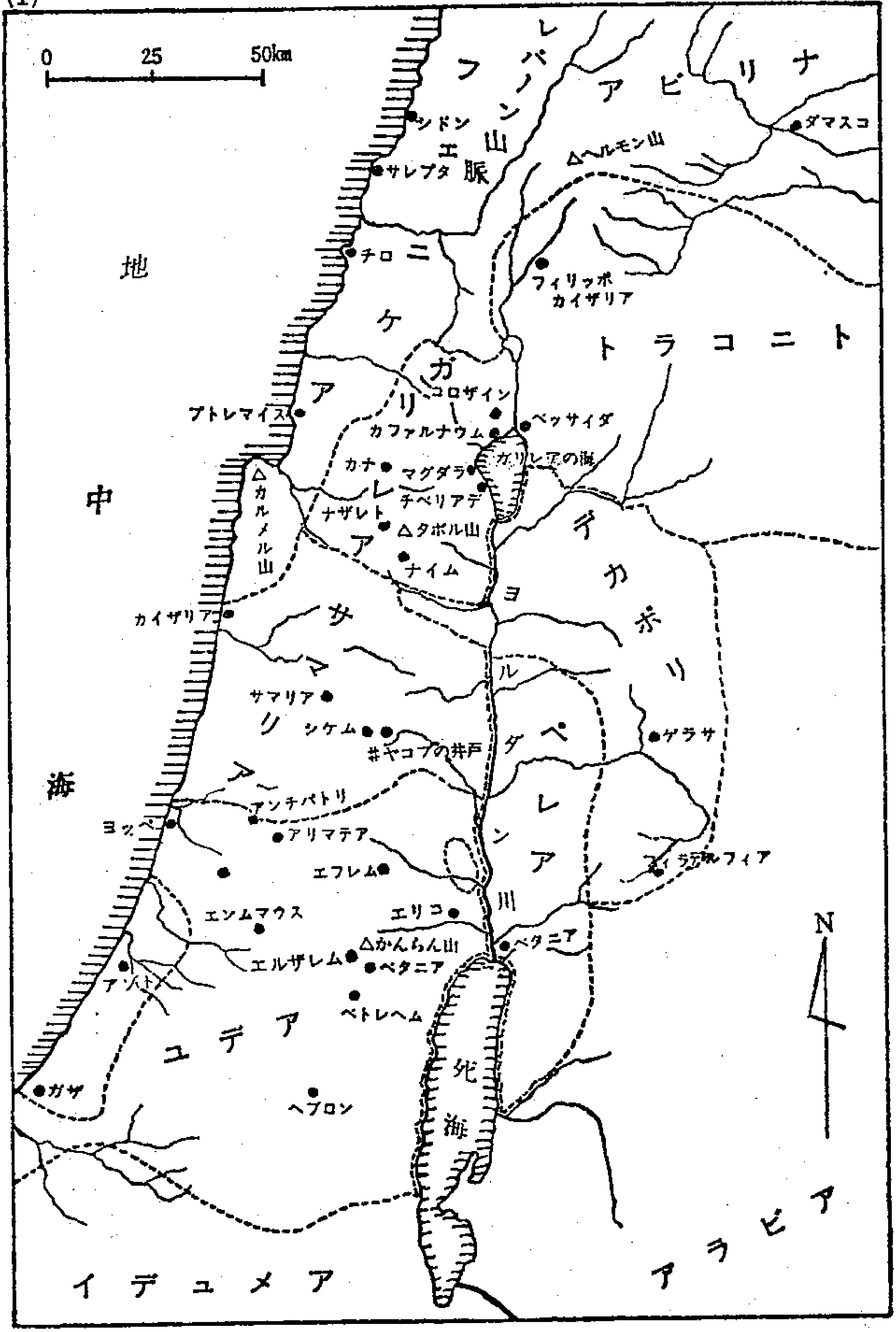




キリスト時代のエルザレム



(1) キリスト時代のパレスチナ



新 約 聖 書　　定価 1800円

昭和34年7月13日　第1刷発行　　昭和50年6月30日　第22刷発行

訳 者　エ・ラ　ゲ

発行所　中 央 出 版 社

〒160　東京都新宿区四谷1の2
電　話　(03) 359—0374〜5 (編集部)
359—5427〜8 (書　店)
〒160　東京都新宿区若葉1の5
電　話　(03) 359—0451〜2 (営業部)
振　替　東京 62233番

印刷所　聖パウロ会八王子修学院

(落丁・乱丁はおとりかえいたします)